

メディア、あるいはファシズム

—〔4〕現代の医療技術、内なる優生思想、そして生命の世紀へ—

吉 田 和比古

0 はじめに

「生・老・病・死」—これは、すべての人間にかかわる問題である。もちろんその関心の中身、関心の度合いは世代によって異なるだろう。たとえ人が健康な状態にいてさえも、はちきれんばかりの若さの真つ只中においても、年齢とともに次第に自らの肉体や気力に少しずつ裏切られることを実感する年齢になっても、たえずこの4つのキーワードは、「喜怒哀楽」という感情の4つの要素とかけ合わされて、我々が日々生きる時間の根底をさまざまに形づくっている。

本稿は、筆者が過去数年間収集してきた「生老病死」に関する録画ビデオテープのアーカイブスの役割も果たす。収集された番組や映画の時間の総計は、200時間に及び、どちらかといえば膨大なものである。このことは、テレビや映画などの映像メディアが、「生老病死」に対する人々の強い関心の有りように、映像の特性を生かした形で対応してきた結果であるとも言える。筆者自身も映画やテレビ番組をとおして、さまざまな医療現場の実態や、最先端技術の状況、命にまつわる人間の歴史やドラマの光と影との一端をかいま見ることができ、また当事者たちの苦悩をわずかながら共有することができたように思う。一人の人間として経験することには限界があるとはいえ、映像メディアは、そうした限界を乗り越えて人間の多様な生きざまに触れる機会を提供してくれるものとして、その社会的役割を果たしていくこと

ができるだろう。もちろん映像メディア情報は、受動的にそのまま鵜呑みにするのは危険である。それがあくまで「構成されたもの」であるという覚めた認識を持ちながらという、いわばかっこ付きであるが、言語情報からは決して得ることの出来ないビット数の高い情報を、映像が提供してくれることだけは確かである。

「法政理論」の読者の大半が法学部学生であることを想定した場合に、個々の学生が本稿で紹介するビデオ・アーカイブの中から関心を抱いた問題を取り出し、その番組をじっくりと反復的かつ批判的に鑑賞してみることによって、現代の医療の問題がどのような法制度と関わっているのか、あるいはどのような問題がこれまで法制度の網の目に引っかかることもなく見過ごされてきたか、あるいは法の名のもとにどのような非人道的行為がなされてきたか、そしてこれからどのような法制度の整備・充実が具体的に必要となるか—などと、多様な形で問題意識を高めていただきたい。そして自らのリーガル・マインドを鍛えるための具体的なたたき台として活用していただければ幸いである。本稿の目的は、筆者も含めて病氣予備軍・患者予備軍の人間のための、医療情報の分析的・批判的な読み解き方、すなわち「メディカル・リテラシー」の形成にある。

1 ウィルス、化学物質—小さなファシズム

1994年6月27日長野県松本市、深夜、原因不明のまま多くの人が突然倒れたり、命を落とすという不可解な出来事が起きた。その時の、一人の松本市民である善意の第一通報者を、取り調べの警察と報道のメディアの二者はこぞって「犯人扱い」して連日のように書き立てた。第一通報者は、自分の妻が事件の被害者であったにも係わらず、彼の自宅には数カ月に渡り嫌がらせの電話や投書が殺到し、彼はすさまじ

い社会的リンチ(パッシング)に苦しめられ続けた。こうして警察の思い込みの捜査と巧みな誘導による自白の強要という、長い経験からマニュアル化された警察の手法により、そして警察情報を何ら裏付けることなく、そのまま報道したメディアの煽動的な体質のゆえに、また一つ「冤罪」が起きる。世に言う「松本サリン事件」である。明るく年の3月、東京の地下鉄で致死生の毒ガスが無差別に散布され、多くの犠牲者が出たとき、我々はようやく松本の事件と結ぶどす黒い糸の存在を認識するに至る。我々は自分の生活圏外のさまざまな出来事に関心を抱くとき、たえずメディアという窓から外を眺めることになるが、そこからの眺めは自然の風景ではなくて、描かれそして巧みにはめ込まれた人工的風景である場合がある。いわゆる「メディアによる情報操作」である。そして、我々はかなり長い間、第一通報者を犯人と思ひ込まされたこと、すなわちメディアに騙されつづけたことに憤慨を感じるとともに、情報の受け手としていかに弱い立場にいるかということ再認識することになる。

カルト集団は、多くの場合カリスマ的指導者のもとに結集する。外側から見れば、ただ単に髪の毛の長くて、たっぷりと栄養の行き届いた胡散臭い人物でも、結集した人々には救世主に見えている。これは主観と客観の絶対的矛盾のいい例である。そしてカルト集団に共通している思想あるいは、特定集団を結束させる論理は一つあればよい。それは「選良」すなわち自分たちは選ばれた人間であるという強い思い込みである。そして社会不安の色濃い時代にあっては、少数の選ばれた人間のみが生きる価値があるのであって、それ以外の人間は「生きる価値がない」と判断される。これは究極のエゴイズムである。後ほど詳しく見るようにかつてのドイツや日本はアメリカなど多くの国々で、それを国家的規模で実行したという歴史的事実がある。小さな集団から見て我々外側の人間はいつの間にか、何ら事前了解もなまに、彼らに「生きる価値がない」と判断されていたわけで、誰も

が彼らの無差別テロの対象になり得たことに、戦慄を覚える。1995年の3月に筆者はたまたま地下鉄の日比谷線に乗っていなかった。あるいは所用でたまたま乗っていたかも知れない。それだけの違いである。無差別暴力を是認する特定のカルト集団を、社会のがんとして排除することはできるが、しかし、そうしたがん細胞を生み出した母体は社会それ自身であることに我々は目をつむるべきでもない。小さなファシズムは大きなファシズムという母体から遺伝子を受け継ぐのである。

以下では、化学物質や、目に見えない恐怖としてのウイルスが時として、無差別テロの手段になったり、あるいは国家権力が開発する殺人兵器となりうる可能性についてとりあげる。サリンは、第2次大戦中にナチス・ドイツが開発した毒ガスで、この毒ガスの使用法は二通りある。一つは社会の中で特定の集団が使用すれば、国家秩序を乱したとして犯罪を形成する使い方になること。そしてもう一つは、対外戦争で用いられれば、それは戦争を早期に終わらせ、そして犠牲者を最小限にするために止むを得ない手段であったという形で正当化される使用法である。ここでは、最近放映されたテレビ番組や公開された映画などを取り上げ、人間と目に見えないウイルスとの闘い、またウイルスを化学兵器にまで仕立て上げる国家意思や、科学者の結果責任の有無などについて幅広い議論を展開するための基礎的知識を紹介することにする。

「世紀を越えて・地球・豊かさの限界 (3)それは DDT で始まった」
〔1999年2月21日・NHK・50分〕20世紀の化学物質の研究の進歩は、相次ぐ世界的戦争と密接に関連している。こうした人工的化学物質の開発は人間の生活を豊かにするとともに、それまで地球に存在しなかった新たな危険性をももたらした。番組では、ペニシリン、DDT、PCBの開発および環境ホルモンの問題について、科学至上主義のはらんでいたさまざまな問題を歴史的に炙(あぶ)りだす。

「アウトブレイク」(‘Out Break’ 1995年・米) 制作/監督: ヴォル

フガング・ペーターゼン、出演：ダスティン・ホフマン、レネ・ルツソ、モーガン・フリーマン。アフリカのモタバ川流域にある小さな村に派遣された米国陸軍伝染病医学研究所のサム(D・ホフマン)は、身体中の皮膚が赤黒く膨れ上がり苦痛にうめきながら死んでいく住民たちの姿を目にする。同じ頃カリフォルニア州のシーダー・クリークという町で同じ症状の伝染病が発生した。ペスト以上に確実に死をもたらすというこの絶望的なウイルス。ところが陸軍から持ち出された未知の血清がこのウイルスに奇蹟的な効果をもたらすという意外な出来事が起こった。発見されたばかりのウイルスに効く血清をなぜ陸軍はすでに持っていたのか。疑念を抱いたサムは陸軍幹部マクリントック少将が企んでいた驚愕すべき事実を知る。新型ウイルスの恐怖を描いた「サイエンス・スリラー」(128分)ウイルスに汚染された救助を求めるアフリカの密林の奥深い村に飛来した米軍機が、証拠隠滅の為に小型原爆を投下する映画冒頭の場面は、妙に現実味がある。

「世紀を越えて クライシス・突然の恐怖—(3)細菌の逆襲・抗生物質がきかない」[2000年2月20日・NHK・50分] 病気を治すための薬があふれる現代医療の中で、薬が新たな細菌を生み出している。1942年、感染症の特効薬として「ペニシリン」(注1)の大量生産が始まる。ノルマンディー上陸作戦をはじめ第2次世界大戦で多くのアメリカ兵の命を救ったこの抗生物質は「魔法の弾丸」と称賛され、発明したフレミングは1945年のノーベル賞に輝いた。しかしこのときフレミングはこう警告している。「抗生物質を使えば必ず耐性菌が出現する」と。すなわち抗生物質で細菌を殺そうとすると、細菌は自らの体を変質させ、その抗生物質に打ち勝つ耐性菌に生まれ変わるというのだ。こうした細菌の性質により、より強い抗生物質を使えば使うほど、そのたびにより強い耐性菌が出現するという無限のジレンマに人類は陥ることになる。1980年代には、臓器不全を引き起こす黄色ブドウ球菌(MRSA)(注2)に対し、抗生物質メチシリンが効かなくなり、最

強の抗生物質といわるバンコマイシンが使われ始める。

(注1) 参照：『読売新聞』2000年5月29日、「碧素(ペニシリン)」
太平洋戦争中の日本においてもペニシリン開発の研究がすで
に行われていた。

(注2) 2000年6月に発覚した「雪印乳業事件」で検出された怖い
バイ菌である。

しかし、その後バンコマイシンも効かない耐性菌 VRE が登場し、
院内感染で人間を苦しめている。耐性菌は人間の食物となる家畜への
抗生物質大量投与からも生まれている。家畜の健康を守り、発育を促
し、経済的効率を高めるための投薬が人間への耐性菌感染につながっ
ている。また一度は撲滅したかに見えた「結核菌」にも耐性菌が現れ、
世界各地で復活し、日本の厚生省も近年「緊急事態宣言」を出した。
アメリカのゴア副大統領は「耐性菌問題は軍事と同じくらい重要な国
家安全保証問題である」と述べている。「細菌の逆襲」に勝つことが
できるのか。番組では耐性菌問題に取り組むニューヨーク郊外クイー
ンズ病院のレイハル医師の活動などを紹介しながら耐性菌のメカニズ
ムとその恐怖を描く。

「スーパー病原菌の脅威～揺らぐ抗生物質の治療～」〔1996年11月10
日・NHK・50分〕東京のある病院で一人の患者が20日間以上も原因
不明の高熱に悩まされていた。不信を抱いた医師は、検査の結果奇妙
な病原菌を発見した。それは全く抗生物質の効かない病原菌で「MU
3」と名付けられた。抗生物質の効かない病原菌の出現は、抗生物質
によって支えられた現代医療の根底を揺るがすものであった。なぜな
ら、抗生物質は病原菌による死の恐怖から人間を解放した薬であるか
らである。しかし「抗生物質の時代」は終わろうとしている。これま
で半世紀にわたり200種類以上の抗生物質が世に送り出されてきたが、
そのたびにそれに打ち勝つ新たな「耐性菌」が出現してきた。いま抗
生物質がまったく効かないという「スーパー病原菌」が人類に襲いか

かろうとしている。病原菌も自らの生命力を駆使して、この地球上で生き残ろうとして必死なのである。いわば、人間の肉眼には見えない地球上の生物の生存への意思の表明とさえ思えてくる。

「世紀を越えて・クライシス・突然の恐怖 (4)未知なるウイルスの逆襲」[2000年2月27日・NHK・50分]時に人間を死に至らしめるウイルス。エイズ、エボラ、天然痘、かつて世界中で2000万人の死者を出したとされるスペイン風邪など、ウイルス感染症は人類に猛威を振るってきた。細菌よりもはるかに小さい地球上で最小の生命体であるウイルスが発見されたのは19世紀末のことである。人間や動物、昆虫、植物などの生きた細胞に寄生し、謎とされてきた数々の伝染病の原因であることが突き止められるようになった。1980年の天然痘ウイルスの撲滅宣言は、ワクチン開発による人類の達成した金字塔とされた。しかし発見から一世紀がたった今もウイルスの引き起こす病気はなくなっていない。エイズウイルスをはじめ、世界の研究者が取り組みながら解決のめどが立っていない病気は多い。それどころか次々と新しいウイルスが発見され、新たな脅威を生み出している。熱帯雨林など未開の奥地に閉じ込められていたウイルスが、開発によって人間社会に解放されてきたことも新しいウイルスが出現する原因の一つと考えられている。たとえば1999年3月には、ニパウイルスと呼ばれる新種のウイルスがマレーシアを襲った。感染すると高熱を発生し、脳が侵され死に至る病気を引き起こすこのウイルスにより、瞬く間に感染が広がり、半年間に100人を越える犠牲者が出た。病気の「感染爆発」を恐れた政府は、非常態勢をとり90万頭の豚を感染源の疑いで処分した。ジャングルを切り開いて養豚場を建てたことで奥地にいたウイルスが豚に感染したのではないかと考えられているが、世界各国の研究者がマレーシアに集まり、現在感染源を調査中である。未開の地の開発や交通網の発達など、文明が高度になればなるほど瞬く間に世界中に広がる危険性が高まってきたウイルス。人類はウイルスを克服する

ことができるのか。番組ではマレーシアのニパウイルスが及ぼした影響を検証しながら、発見以来1世紀にわたって続けられてきた人類とウイルスの攻防の最前線を描く。

「証言ドキュメント・エボラ感染爆発」〔1996年10月10日・BS1・50分〕1995年にアフリカのザイールで突如発生したエボラ出血熱は「感染爆発」と呼ばれ、世界中のウイルス専門家が総力を上げて鎮静化に取り組んだ。この時、世界は感染を広げないために発生地域に原爆を投下するかも知れないと思った人もいた。映画「アウトブレイク」の冒頭では、感染地域のジャングルの中のキャンプ地の村に小型原爆が投下され地上から抹殺された。いつ、どこで起きるか誰にも分からないウイルスの脅威を伝える良質のドキュメンタリー番組である。(1998年度の芸術祭参加作品) WHOの98年度年次報告書(World Health Report)では『エボラを始め、治療法のない感染症が急増している』と警告している。



人間とウイルス/病原菌との戦いは、しばしば映画やドラマに恰好の題材を提供している。ここではそうしたいわばフィクションとしてのドラマが、未来の予見性に満ちていたことを後年つくづく知らされる、あるいは将来そのような再認識がなされるだろうと思われるような作品をいくつか紹介することにする。

「アンドロメダ」(, The Andromeda Strain' 1971年・米) 製作/監督: ロバート・ワイズ、原作: マイケル・クラントン。アメリカのニューメキシコ州の片田舎にある日人工衛星が落下する。近くの街は、一人の赤ん坊とアル中の老人を除いて死滅してしまった。彼らだけが助からなかったのはなぜか。衛星に付着して宇宙の彼方からやってきた病原体と、科学者たちの死闘が始まる。緊迫したドキュメンタリータッチの構成が良くできている映画である。(131分) 原作者マイケル・クライトンの知名度を一気に高めたのは、テレビ・ドラマ「ER

緊急救命室」、映画「ツイスター」そしてS・スピルバーグ監督の「ジュラシック・パーク」である。

「Xファイル ザ・ムービー」[1998年・米] 監督：ロブ・ボーマン
出演：デビット・ドゥカブニー、ジリアン・アンダーソン。人類よりはるか昔に地球に漂着した宇宙人は、氷河期など若い地球の様々な気候変動を乗り切るために、ウイルス化した。人類の未来よりも企業利益を優先しようとする一部の人間は、悪魔に魂を売り渡そうとするかのように宇宙人と結託し、高度な科学技術と引換えに地球を売り渡そうとする。〔121分〕

「12モンキーズ」(‘12 Monkeys’ 1995年・米) 監督：テリー・ギリアム、出演：ブルース・ウィリス、ブラット・ピット。謎の細菌に侵された近未来から、原因究明のために1996年にタイムトラベルした男の活躍を描いたSFサスペンス。人類の99%が謎のウイルスによって滅亡した近未来。その原因を探るため科学者グループは、ウイルスが蔓延し始めた1996年に囚人のコールを送り込む。原因究明の鍵となる言葉「12モンキーズ」を教えられタイムスリップしたコールは、数回の失敗の末1996年に到着、以前出会ったレイリー博士に協力を求め調査を進めていったコールは精神病院に収容された時、彼の世話役だった患者ジェフリーが事件の鍵を握る人物であることを突き止める。ジェフリー役のB・ピットが好演している。〔130分〕

「変わる地球環境 ②進む温暖化・広がる感染症」[2000年11月2日・ETV・45分] 1999年夏、思いもよらない感染症がニューヨークを襲った。マンハッタンの中心でカラスが大量に死に、被害には人間にも及び7人が死亡。詳しい検査の結果アメリカで初めて見つかった病気であることが判明。原因はアフリカから来たウイルスで、病名は「西ナイル熱」と断定された。この突然の感染症の発生の背景としては、地球規模での温暖化にあると言われている。温暖化は病虫害の生息環境にも変化を与え、気温が1度上がるたびに「感染症蔓延」のエ

リアが確実に広がっている。ヒートアイランド現象の進むニューヨークでは、蚊は越冬の手段も見つけ生息範囲を拡大していると言われていいる。地球の温暖化を加速しているのは、人間の産業活動・膨大なエネルギーの使用に起因するわけであるから、感染症の直接の原因はウイルスを媒介する蚊であるにしても、間接的原因は人間自身にあることを思い知らされる番組である。番組の後半では、日本におけるマラリア感染の実態が報告される。温暖化が進むと有害な病原体をもつ蚊が日本に定着する可能性は否定できない。番組では専門家が感染しないためのきわめて分かりやすい方法を提言している。それは「できるだけ蚊に刺されないこと」である。しかし、行政レベルでの防疫措置は手薄であり、ここにも日本の危機管理の脆弱さが露呈していると指摘する。

「静かなる恐怖～アフリカにおけるマラリア撲滅の実態」〔2000年10月7日・BS1、製作：ラ・サンキューム／モザイクフィルム／仏・1999年・50分〕



日本における1999年の海外渡航者の数は約1600万人と言われるが、旅行や仕事で熱帯や亜熱帯の国々へ出かけた人を中心に「輸入感染症」の発生が日常化している。赤痢やコレラなど様々な病気の中で、厚生省が特に警戒を強めているのは「熱帯熱マラリア」である。適切な治療を早く受けないと命の危険を伴うが、国内の一般病院では診断がつかないことがある。マラリアは、マラリア原虫をもつハマダラカ属の蚊に刺されて起こる感染症で、原虫の種類によって「熱帯熱」「三日熱」「四日熱」「卵形」の4つに分類される。最も危険なのは「熱帯熱マラリア」であり、腎不全やショック症状を伴う。世界保健機構(WHO)の推計では、全世界で年間3－5億人に患者が発生。東南アジアや中南米、アフリカを中心に、熱帯・亜熱帯の100ヵ国余りの国々で流行していると言われる。

「感染症新時代～見直される予防・治療」[2000年1月19日『金曜フォーラム』・70分] 2000年11月26日、東京で日本医師会主催で行われた市民公開講座を録画・編集した番組。パネラーには、国立感染症研究所、結核研究所などの専門家が集い、①ウイルス感染②結核③食中毒および④性感染の4点にわたり、感染の現状と予防措置について、図表を豊富に用いて啓蒙的かつ大変分かりやすい医学情報を提供してくれる。いずれの場合も、海外旅行の活発化、食料自給率の低下に伴う食材の大量輸入、個人の健康管理のルーズさ、性モラルの低下、一部の食品会社における職業倫理の低落など、日本人社会のライフスタイルの急激な変化と油断の間隙をぬった形で目に見えない病原菌の逆襲が始まっていることを実感させる番組である。同時にこれは単に一国だけで解決できる問題ではなく、地球レベルで「サーベイランス＝発生動向調査」などに取り組むべき問題であることをよく教えてくれる。メディカル・リテラシーの向上を教育目標の一つとした場合、感染の原因が次第に個々の家庭に侵入しつつある今日、危機管理を行政だけに依存することの危険性が明瞭に意識させられる番組である。重要なのは正確な医学的情報を市民が共有することであり、番組ではそうした共有される情報を「知識ワクチン」と呼ぶ。大変ユニークな造語である。そして、みんながそのワクチンを打っていただきたいと呼びかけている。

以下に紹介する4つの映像資料は、人間とウイルスの闘争という二項対立ではなく人間が別の人間を抹殺するために病原菌や医学知識を利用しようとする危険な試みを扱った話題である。

「生物兵器～遺伝子操作の秘密 (Bioterror)」[1999年4月9日・BS1・50分、製作：TVF プロダクション／英 1998年] 生物化学兵器の弱点は、味方の兵士も感染する可能性があるということである。しかし遺伝子工学の発達により、特定のヒトゲノムを持つ人間を対象に、すなわち特定の人種を対象にして使用する可能性が生まれてきた。番

組では、テロリストが生物兵器を手にした場合にどのようなプロセスを経て犯行におよぶかが恐ろしいほどリアルにシミュレートされている。アメリカ政府が本格的に、生物化学兵器のテロ対策を取るようになった契機は1995年3月20日、東京で発生した「地下鉄サリン事件」にあるとされる。この事件の起きた日本においては果して、この種の危機管理に対して有効な対策が取られているだろうか、不安を抱かざるを得ない。

「細菌戦争の脅威～暴かれた生物化学兵器開発」[1999年3月26日・ETV・45分、製作：BBC・WGBH/英・米 1998年] アメリカ政府は、例えばテロリストの手で遺伝子操作により作り出される未知のウイルスが、実際に使用される場合を想定したシミュレーションを行っている。これは一種の危機管理の対象として想定される災禍なのである。日本では現実にカルト教団による無差別の毒ガス散布事件が起きて、社会を震撼させたことは記憶に新しい。番組では生物化学兵器の開発の実態について報告する。

「沈黙の陰謀」[‘The Patriot’ 1998年・米] 監督：ディーン・セムラー、出演：スティーブン・セガール、藤谷文子。免疫学者ウェスリー(S・セガール)は、自分の研究が軍事目的で使われたことに良心の呵責を覚え、引退して地方の町で療養所を営んでいた。ところがある日、極右主義のテロリストが町に細菌兵器をばらまくという事件が発生する。ウェスリーは猛毒ウイルスとテロリストを撃退すべく猛然と反撃を開始する。「沈黙の要塞(1994年)」では、アラスカのイヌイットの聖地で無謀な自然破壊を伴う開発に着手した巨大石油会社エイジズという、利権のためなら手段を選ばない社長に敢然と立ち上がった。その映画のラストでは、環境保護を訴えるというおまけをつけたセガールであるが、今回は、愛娘の藤谷と共演して細菌兵器の恐怖を描いている。なお、原題のパトリオットとは、弱腰の政府に業を煮やした極右テロリスト集団を指し示している。

「ザ・スタンド」(‘The Stand’) テレビ・ムービー。アメリカの細菌兵器研究所で事故が発生し、瞬く間に致死性のウィルスが全米に拡散した。アメリカの現代ホラー小説の第一人者スティーブン・キングの小説のテレビ映画化した作品。なお、原作の完全訳が最近日本でも出版されている。



国家の犯罪という時には、旧日本軍の化学・細菌兵器の開発およびそれに伴う人体実験についても触れる必要があるかと思われるが、ここでは関連する映像資料を紹介するにとどめておく。ただ、本稿においても後述するように、かつてそうした人体実験にかかわった人間と、薬害エイズの原点となった「ミドリ十字」という薬品会社とは何らかの形で結びついているということは指摘しておきたい。なお、当時の日本軍がかつての満州に大量に遺棄した化学兵器の撤去作業は、2000年によろやく日中共同で始まったばかりである。

⇒旧日本軍の化学・細菌兵器関連映像資料：

「731部隊と石井四郎」〔1999年4月23日・NT21・54分〕

「封印された虐殺・731部隊～ペスト菌攻撃の真相」〔1997年8月16日・NT21・30分〕

「教師たちの見た731部隊」〔1996年11月9日・NHK・45分〕

「黒い太陽七三一」〔‘The Devil 731’ 1988年・香港〕製作：傳奇監督：牟敦蒂。第2次世界大戦中、満州に細菌兵器開発研究のために派遣された関東軍731部隊の残虐行為の全貌を映画化したドキュメンタリー・ドラマ。森村誠一の小説「悪魔の飽食」でも語られた人体実験の様子が描かれている。満州ハルビンの関東軍731部隊に、千葉県から少年兵3人が送り込まれる。軍医・石井四郎中將を部隊長とするこの部隊では伝染病の研究を表向きに、細菌兵器研究開発のために中国人捕虜を使った人体実験が行われていた。次第に少年兵たちは、人間が道具のように使い捨てられていく状況に麻痺し、無感覚になっ

ていく。(90分)

化学物質が人間を不幸にした事例として、すぐさま「水俣病」および「新潟水俣病」、また場合によっては「核」の問題も射程に入ってくるのであるが、これらの問題とメディアの関係についてはまた別の機会に詳しく論じてみたい。化学物質をめぐる現代科学の光と影の二面性については、次に紹介するテレビ番組がさまざまな示唆を提供してくれるであろう。

「20世紀の化学物質～人間が造り出した‘毒物’」〔1999年7～9月・NHK 人間講座、講師：常石敬一、12回シリーズ 各30分〕科学が飛躍的に進歩した20世紀は、一方で戦争や犯罪における化学物質の使用や、深刻な環境汚染などに人類が悩む時代でもある。化学の発達と毒物の歴史をたどり、その将来を考える。講義内容：(1)現代の踏絵・化学物質、(2)化学のブレイクスルー、(3)砒素化合物①～薬としての砒素、(4)砒素化合物②～猛毒の作用メカニズム、(5)窒素化合物～無から有を生み出す「錬金術」～(6)塩素化合物①～水道水の殺菌、漂白剤、(7)塩素化合物②～合成ゴム、合成殺虫剤 DDT、(8)青酸化合物～生命の起源～、(9)リン化合物～マッチから神経ガスまで、(10)水銀～米の増産、蛍光灯、(11)ダイオキシシンと PCB～予期せぬ犠牲、(12)新しいアプローチ。

常石氏は、講義の最後で PRTR(環境汚染物質排出・移動登録制度)や PL(製造物責任法)などの法制度の整備を強く主張している。また、すでに制定された二つの法律「化学兵器禁止及び特定物質の規制等に関する法律」と「サリン等による被害の防止に関する法律」などがより効果的に運用されるための、社会的監視・管理システムの充実を提唱している。

2 世紀を越えて・命・「生老病死」

現代の医療がはらんでいる複雑な問題は、科学技術の進歩という真実の追求と、人間として持つべき倫理という正義の維持との二項対立のはざま大きく振動していると言ってよい。しかしながら、たいいていの人々はこうした切実な問題を真に自分の問題として考えるには、あまりにも情報が少なすぎるし、あまり学習する機会もない。その意味で、NHKの次のシリーズは、問題の全体を大づかみに俯瞰する意味で、まず導入的に鑑賞するのに恰好の映像資料となるだろう。なお、番組内容の紹介・要約に際しては、NHK テレビ番組ガイド誌「ステラ」を参照した。

世紀を越えて・命・生老病死 (NHK スペシャル) 各50分

- (1) 人体改造時代の衝撃
- (2) 遺伝子診断～新しい予知医療の光と影
- (3) 脳死移植～生と死の問いかけ
- (4) ト라우マ～心の傷
- (5) がんと闘う～患者主役の治療へ
- (6) 自分らしく死にたい～安楽死が問いかける生と死

2.1. 遺伝子医療・臓器売買・予防（予知）医療

「世紀を越えて・命・生老病死 (1)人体改造時代の衝撃」〔2000年4月23日・NHK・50分〕医療と生命倫理の課題を見据え、21世紀の「生と死」の姿を探るシリーズの第1集は、クローン技術などを応用し、近い将来訪れるであろう「人体改造時代」を検証する。アメリカ、マサチューセッツのバイオ企業では、ヒトの皮膚が大量生産されている。赤ん坊の皮膚の一部を培養すると、野球場ほどの広さの人工皮膚がで

き、やけどや皮膚潰瘍の患者にすでに販売されている。さらにボストンの企業では拒絶反応を抑えるために、ヒトの遺伝子を導入した臓器移植用のブタを開発。ブタからヒトへの臓器移植が軌道に乗れば、巨大な臓器産業が出現する。バイオテクノロジーはもとより、クローン人間作りにも国レベルの法的規制がないアメリカではこうした研究が次々と進められている。中でも注目されるのが、ヒトのES細胞を使った臓器作りである。ES細胞は、ヒトのあらゆる器官に分化できる万能の細胞である。1997年シリコンバレーのジェロン社は、ヒトの受精卵からES細胞を取り出すことに成功。将来的には培養条件を変えることでこのES細胞から臓器、神経、筋肉などあらゆる器官を作ることでもできる。さらにこの企業は、クローン技術をES細胞による臓器作りに応用しようとしている。患者の体細胞を核移植した胚から取り出したES細胞を使い、完璧な臓器のコピーを作るのである。患者自身の臓器だから移植しても拒否反応はまったくない。もしも、ある器官の機能が衰えたら、スペアの臓器を取り替えることも可能になる。しかしこの研究の行き着く先はクローン人間の製造とまったく同じ。クローン人間はいつ誕生してもおかしくないという。番組では衝撃的な映像を交え、人体改造時代に向けて加速する研究の最前線を描き、同時に「生命倫理 (バイオエシックス)」を問う。番組の製作者のコメント：健康と長寿を望むのは人間なら当然です。でもそのためならば、生命を利用したり、何をやっても許されるのか。その答えが出ないままテクノロジーはどんどん進み、新たなビジネス開拓のために莫大な資金がつぎ込まれています。答えを出すのは難しい問題だからこそ、視聴者の皆さんにぜひ考えていただきたいと思います。(伊藤純・番組プロデューサー、【ステラ】2000年4月28日号、28ページより引用)

「世紀を越えて・命・生老病死 (2)遺伝子診断～新しい予知医療の光と影」〔2000年4月30日・NHK・50分〕今、世界各国の研究者の間で

は、人の遺伝子解読をめぐり激的な競争が繰り広げられている。人の遺伝子情報が次々と解読されつつある現在、病気の診断と医療は大きく姿を変えはじめた。特定の病気に係わる遺伝子の異常があるかないかを調べることで、将来、病気の起こる可能性を予測できるようになったのだ。こうした遺伝子診断は、今、医療現場で現実に行われており「予防医療」や「予知医療」とも呼ばれる新しい分野が築かれようとしている。これまでは病気にかかってから治療を受けていたが、遺伝子がかわる乳がんや大腸がんなど多くの病気で、発病する前に病気の原因を取り除いたり、発病しないように注意したりすることが可能になってきたのである。しかし遺伝子診断ができる病気には、治療法のあるものばかりではなく、現代医療では治療法のない病気も含まれる。アルツハイマー病などのように発病する可能性を避けることが出来ず、予防も難しい病気の場合、その病気の遺伝子を持っていると判断された人はいつも発病の不安を背負いながら生きていかなければならなくなる。さらに、受精卵の遺伝子を検査することにより、あらかじめ病気の遺伝子があるかどうかを調べる「受精卵診断」も欧米では始まっている。病気の可能性のある子は生まない「命の選別」が許されるのか、議論が続いている。こうした遺伝子解読による医療の変化にどう立ち向かい、新しい医療の形をどのように作ろうとしているのか。番組では、アメリカを舞台に遺伝子診断を受けた人の悩みにせまり、人と病気の新たな関係を探る。〔番組製作者のコメント：三雲節プロデューサー〕アメリカでは医療保険を使って遺伝子診断を受けると、診断結果が保険会社に知られてしまい、保険料が高くなったり、取り消されたりすることが懸念されています。また病気に関する個人のプライバシーが侵され、社会的な差別を受けかねない。そうした問題を法律などによってどうクリアしていくのかが今求められています。

『「世紀を越えて」を読む～遺伝子診断・病はどこまで予知できるか』

〔2000年5月11日・ETV・45分〕NHK スペシャルの「世紀を越え

で」で提起されたテーマをより深く掘り下げ、町永俊男 (司会者) が、すでに放映された番組のダイジェストを見ながら、専門家とともに読み解く番組で、番組自体が一種の「メディア・リテラシー」を構成しているという意味で、大変ユニークな番組である。世界各国の研究者の間で繰り広げられる遺伝子解読競争の結果、「予防医療」という分野が築かれようとしている。番組では、遺伝子解読が生み出した「人と病気の新しい関係」について考える。

「遺伝子～遺伝性難病の臓器移植と遺伝子診断と～」〔2000年5月29日・『NNNドキュメント'00』・TeNY・30分〕 遺伝子の研究が進み、遺伝子診断が血液採取で簡単にできるようになった。だが、同時に治療法がない難病患者にとっては死が近いことを知ることになる。自分の遺伝子情報を知った人間はその宿命とどう戦うべきか。自分の母親をFAPという不治の病で亡くしたある青年は結婚の前に遺伝子診断を受ける決意をした。悪い遺伝子が出る確率は2分の1である。もしそうであれば、彼は人生の大いなる喜びでもあるはずの結婚を断念しなければならぬのか。

2.2. 脳死の判定・臓器移植

「世紀を越えて・命・生老病死 (3)脳死移植～生と死の問いかけ」〔2000年5月31日・NHK・50分〕 1967年、南アフリカで世界初の心臓移植が実施されて以来、医療技術の進歩により移植件数は急増し続けている。今、世界で行われている臓器移植は年間3万5000件以上が確認されており、臓移植手術後5年以上の生存率は65パーセントを越え、これまで助からないとされていた重症患者に大きな福音をもたらしている。しかし移植医療が広く普及する陰で、臓器移植の当事者たちは深刻な心の葛藤に直面している。「脳死」という新たな死に向き合うことになった家族の苦悩。一方、臓器移植以外に助からないと診

断された患者も苦悩し続けている。多くの患者が死の恐怖と臓器を提供されることによる罪悪感を感じ、その苦しみは、移植手術が成功したあとも消えることなく続くという。番組では、欧米と日本の医療現場で模索する人々の姿を追いながら、移植医療の行方を探る。

「報道特集・日本初の臓器移植」〔1999年2月28日・BSN・50分〕1997年10月に「臓器移植法」が施行されて以来、1999年2月28日は、初の臓器移植が行われる日本の医療の転機の日である。臓器が人から人へと生かされていく時代に入った。番組では臓器の移送風景をLIVEで追いながら、ドナー（提供者）とレシピアント（受益者）、そしてそれぞれの家族の心境を丁寧に報道しながら、臓器移植をめぐる「報道とプライバシーの保護」というメディアの新しいルールの確立の課題についても考えていく。

「揺れた生と死の境界線～初の脳死からの臓器移植」〔1999年3月1日・NHK・『クローズアップ現代』・30分〕日本初の臓器移植に際して、生と死の微妙な判定が問題となっている。それは前提としての医師の脳死判定と法律上の判定基準の食い違いでもある。どのようにして全国にいる多数の希望者（待機患者）の中から、どのようにして特定のレシピアントの優先順位が決定されるのかという難しい問題も含んでいる。

「移植医療を支える条件」〔1999年3月1日・NHK『あすを読む』・10分〕脳死移植をめぐる「医療の情報公開」と「プライバシーの保護」そして「メディアの報道責任」についての提言番組。

「世紀を越えて」を読む～施行から3年・臓器移植の課題」〔2000年6月15日・ETV・45分〕「世紀を越えて(3)脳死移植」で提起されたテーマをより深く掘り下げて、今後の日本のあり方に引きつけて読み解いていく番組。脳死を前提とした移植医療が定着していく中で、生と死をめぐる新たな問題が生まれている。移植を受けた人は、他者の死を前提としていることの罪悪感に直面することになる。また臓器提供

者の家族は、だれに提供したのかを問い始めると、移植の前提となる「匿名性の関係」が崩れていく。移植医療によって生まれた新しい生命観と、いったいどのように向き合っていくのか。日本の臓器移植のあり方について考える。

「臓器売買契約」(1998年・米テレビドラマ) [2000年11月29日・WOWOW・90分] 近未来社会では、豊かな人間と貧しい人間とはますます二極化し、貧しい人間は臓器売買を条件に、豊かな衣食住の生活を保証される。だが、ある日突然にその人間は裕福な人間の延命のためにその臓器を提供しなければならない。その臓器が心臓であった場合、それは彼にとって死の宣告となる。

「ボディ・バンク」(‘Extreme Measures’ 1996年・米) 監督：マイケル・アプテッド、原作：マイケル・パーマー。出演：ヒュー・グラント、ジーン・ハックマン。ニューヨーク・マンハッタンにそびえるグラマシー病院。緊急医療室に勤務する若い医師ガイは、急患者の不可解な死の謎を探るうちに、ホームレスを使った人体実験を行う病院の裏の顔を知ってしまう。陰謀に立ち向かう青年医師の姿を描きながら、医療倫理を問うサスペンス・ドラマ。

「ソイレント・グリーン」(‘Soylent Green’ 1973年・米) 監督：リチャード・フライシャー、原作：ハリー・ハリスンの『人間がいったばい』脚本：S・R・グリーンバーグ。この映画は、人間の体の一部としての臓器売買ではなく、人間が丸ごと使われるところが恐ろしい。時は近未来で、町はゴミであふれ大気汚染も進行している。食料を求める市民の暴動は力づくで鎮圧される日々が続き、治安も乱れている。膨大な人口増加のために地球上はいたる所で食料難に陥っている。そのため人々には栄養補給のための「ソイレント・グリーン」という緑色の錠剤が配給されている。一方、高齢者は死期を悟ると、終末医療の施設を訪れ安楽死ベッドの上に横たわる。部屋の壁はスクリーンとなって鮮やかな色彩でかつて存在した自然の美しい風景が映し出され、

ベートーベンの田園交響曲が流れる中で、安楽死希望者は静かに処理され、いずこともなく運ばれていく。膨大な人間の死体がどこに運ばれていくのかを捜査していた主人公の刑事が突き止めたその行き先は意外な場所であった。

2.3. ト라우マ・PTSD

「世紀を越えて・命・生老病死⁽⁴⁾トラウマ～心の傷」〔2000年6月7日・NHK・50分〕災害や犯罪、戦争など、人が極度に強い恐怖にさらされたときに受ける深い心の傷—ドイツ語ではトラウマ (das Trauma) という。最近トラウマが人々の精神や身体に、深刻な後遺症を残すことが分かってきた。もっとも代表的な病が PTSD [心的外傷後ストレス] である。トラウマを生んだ体験が脳裏によみがえり、その恐怖感から日常生活を送ることが困難になる。さらに拒食症や多重人格など、さまざまな精神疾患の原因もトラウマにあることがわかってきた。最近の研究結果により、トラウマが脳の機能に異常をもたらすメカニズムも明らかになりつつある。脳内で分泌されるホルモンの一つ、CRF は恐怖の感情を作り出す物質であり、通常は生命が危機にさらされるなど緊迫した状況でしか分泌されない。だが PTSD 患者はわずかな刺激でこの物質が大量に分泌される。番組では最新科学をもとに「心の傷」を解明していく。

「トラウマの心理学」〔2000年10～12月・NHK 人間講座・講師：小西聖子、12回シリーズ 各30分〕犯罪被害者の問題がマスメディアに登場するようになって、多くの人たちが被害者の権利や心の傷に注意を払うようになった。犯罪被害者の保護、児童虐待の防止、ストーカーの規制などに関して、2000年の5月には新しい法律が国会で成立し、年末にも施行される運びとなった。とはいえ、被害者の問題はどれだけよく理解されるようになったいえるだろうか。特に心の問題はどうか。

であろうか。ともすれば我々は犯罪と犯罪被害者の問題を他人事として、ほんの少しの同情心を持つだけで自分の世界に安住してはいないだろうか。ともあれ、明日はわが身という視点から、この講座で扱われる犯罪被害とトラウマの関係について、しっかりとした理解が必要となってきたのは確かである。

講義題目：(1)犯罪被害者の苦痛、(2)トラウマとは何か、(3)よみがえる心の傷・PTSD、(4)性暴力への誤解、(5)ドメスティック・バイオレンス、(6)被害にあったとき、(7)子どもの心の傷、(8)トラウマの治療、(9)援助者は何ができるか、(10)被害者と加害者、(11)加害者への取り組み、(12)私にとっての被害者サポート。

医療問題ではないが、トラウマについては、暴力との関連を同時に考えていかなければならないであろう。その意味では、次に紹介するテレビ講座もまた、広い意味ではメディカル・リテラシーを形成するものである。

「家族の闇を探る～現代の親子関係～」〔1998年7～8月・NHK 人間大学・講師：斎藤学、12回シリーズ 各30分〕

講義題目：(1)現代家族と子どもたちの事件、(2)いじめ・いじめられ関係と家族、(3)親を攻撃する子どもたち、(4)児童虐待というトラウマ(心的外傷)、(5)家庭内性暴力と封印された記憶、(6)子どもを虐待する親たち、(7)繰り返される夫の暴力、(8)家族から逃げる父親たち、(9)子どもに侵入する母親たち、(10)治療対象としての家族、(11)回復運動とアダルト・チルドレン、(12)「生き残り」から「成長へ」へ。

2.4. がんとの闘い

「世紀を越えて・命・生老病 (5)がんと闘う・患者主役の治療へ」〔2000年6月11日・NHK・50分〕今や日本人の死因第1位となった「がん」。しかし日本では転移したがんや進行がんの患者に対して十

分な治療ができず、医療機関から見捨てられた「がん難民」も多い。その原因を患者が医師から自分の症状について十分な説明を受けず、がんと戦う術(すべ)を知らないまま死を迎えることによる。特に抗がん剤治療の専門家がないこと、副作用に対する恐れが治療を阻み事態を悪化させている。一方20世紀後半、国をあげてがんと取り組んできたアメリカでは、たとえ治らないがんであっても、がん患者が自分の病状をすべて知り、医師が提示する複数の治療法の中から自分で納得のいくものを選び、最後までがんと闘っている。番組では「医療における情報公開」をテーマに患者が治療の主人公になっているアメリカの医療現場の実態と日本の抗がん剤治療の試みを紹介し、がんと人間の戦いを描く。

「ガンと闘う(‘Cancer Wars’) ①無視された危険性(1970年以前) ②勇気ある人々(1970年代) ③原因の追求(1980年代) ④医療と政治の課題(1990年代)」[1999年5月14・15・21・23日・BS1『BSドキュメンタリー』製作：MBC/WETA/チャンネル4・英/米 各50分] がん撲滅のための人間のひたむきな努力を歴史的にとらえた番組。1995年、アメリカの科学歴史学者ロバート・プロクター(ペンシルバニア州立大学)が旧東ドイツのイエナ(Jena)を訪れた。第2次大戦後の50年前イエナは廃墟と化していた。プロクターの目的は、ナチスが研究していたガン予防の資料を見つけることであつた。1930年から40年代にかけてナチスの科学者たちはタバコの害によるガンの研究をしていた。しかし敗戦後の混乱で科学者たちは姿を消し、研究資料も忘れられた。戦後の50年間世界各国でガンの研究が行われたが、その研究成果は政治的利害関係や企業利益のために無視され数多くの人々が犠牲となつた。イエナを拠点としてナチスの科学者たちの行った研究は、その後のガン研究を大きく変えてしまうほどの情報を含んでいると言われていた。その膨大な資料は、イエナ大学の地下倉庫から発見された。当時のナチス系の新聞には「タバコの危険性究明へーヒト

ラー総統、イエナの科学研究所へ10万マルク寄付」という見出しが掲げられた。こうしてタバコと健康の問題の本格的研究がドイツで始まる。責任者はナチ親衛隊員でもあったカール・アスベル博士。イエナのあるチューリンゲン州での人種政策の実験を握っていた人物である。ナチスの優性思想の枠組みの中で、ヒトラーの人種政策は妊婦におけるガン予防にまで及んでいた。無論、純粋なアーリア人の子孫を増やすという目的のためである。ナチスは乳癌の自己診断キャンペーンまで行っていた。さらに公共の場における禁煙運動を押し進める。今日の世界の動向を半世紀前に先取りしていたことになる。しかし、当時のドイツを囲む世界は、こうした政策をヒトラーの抑圧的態度の表れとみなし、嘲笑しさえしていた。現代において、タバコのテレビCMは縮小傾向にあるものの、タバコという商品は以前として国家の貴重な財源であり続けている。少なくとも日本では。

2.5. 再生医療

「人間の体はどこまで再生できるか～最新医療の可能性」[1999年3月18日・NHK『クローズアップ現代』・30分]「再生医療」というのは病気や事故などで欠損した体の部分を、人間の自然治癒力を生かしながら骨や血管などを再生し、健康な体を取り戻そうという医療技術である。番組ではそうした先端医療技術の可能性を探る。

「21世紀の再生医療とは」[2000年10月22日/12月10日・「報道特集」BSN・50分]

ここ数年の、医療関連番組は我々の理解が追いつかないほどの「技術の進歩」に焦点をあてた番組が目立つ中で、次の番組は「医」の原点を見つめなおす上で大変多くの示唆に富んでいる。医の倫理の荒廃が顕著になってしまった現代社会において、医療に従事する人の真の良心を見る思いのする番組である。

「人生を変えた奇跡の手術～日本初のバチスタ手術・医師と家族の記録」[2001年1月17日『プロジェクトX・挑戦者たち』NHK・45分]
平成8年(1996年)12月3日、日本で初めての画期的な外科手術が行われた。動いている心臓の一部を切り取る「バチスタ手術」である。死を宣告された心臓病の患者に生への希望を与える劇的な手術だが、非常に高度な技術を必要とするため、これまで日本では取り組む医師がいなかった。手術が行われたのは、神奈川県鎌倉市にある湘南鎌倉総合病院。執刀医の須磨久善は理想の医療を求めて、都内の大病院からこの病院にやって来た。須磨のもとには若い医師、看護婦が集まり、初めての手術に挑むプロジェクトが誕生した。だが最初の手術は患者の病気の進行が早く失敗に終わる。医学界から批判が起こる中、この手術の継続を希望したのは亡くなった患者の妻であった。新しい手術への挑戦を続ける医師と、自らの生命を医師に預け再び人生を取り戻した患者たちの姿を描く。

「驚異の生命・スーパーヒューマン (1)外傷からの回復 (2)進歩する移植医療 (3)自己再生の力 (4)ウイルスと免疫システム (5)がん治療」[2000年1月27日・2月3/10/17/24日・ETV・各45分]

2.6. 安楽死・尊厳死－延命医療

アメリカ・オレゴン州の州法「尊厳死法(The Oregon Death with Dignity Act)」医師による自殺の補助(ほうじょ)が認められるようになった。自殺補助の申請には、まず医師が「余命半年以下」という診断が必要となる。患者は、自殺補助を口頭で申請すると、15日の待機期間が始まる。その間別の医師から同じように「余命半年以下」の診断を受けなくてはならない。15日以上待機した後、今度は書面で補助を申請し、さらに48時間以上待ってもう一度口頭で申請すると、医師から致死量の薬が処方される。その薬を飲むか飲まないかは、患

者の自己決定に委ねられる。

10年前、アメリカでは「患者の自己決定権法」が制定された。やがて、患者の自己決定権は、死を選ぶ決定権まで拡大する傾向にある。なお用語上次の3点を前提として確認しておく。「尊厳死」～人工呼吸器を取り外すなどの延命治療の中止。これは多くの国で採用されている。「間接的安楽死」～医師が致死量の薬を処方する。「積極的安楽死」～医師が「筋肉弛緩剤」などの薬物を投与する。これを認めている国はないが、後述のようにオランダでは合法化に向かって動きだしている。

「世紀を越えて・命・生老病死 (6)自分らしく死にたい～安楽死が問いかける生と死」[2000年6月17日・NHK・50分] 今世紀の医学の発達により、患者は生命維持装置による延命を望めるようになった。だが、その一方ではそれを拒み「自分らしい死」を望む患者がいる。アメリカでは植物状態の患者から人工呼吸器を外すことを認めた1976年の「カレン裁判」以降、自然な死を求める動きが各地に広まっている。その究極の姿としてオレゴン州では、医師が致死薬を処方し、回復の見込みのない患者に対する自殺の幫(ほう)助が法律で認められるようになった。番組ではオレゴンの事例を軸に21世紀の「終末期医療」の行方を探る。

「人は死を選択できるのか (1)自殺装置を作った医師」[1994年9月4日・ETV、1994年/米・45分] 1990年、アメリカ・ミシガン州のデトロイト郊外でアルツハイマー症の女性患者ジャネットさんが、医学博士のジャック・キボキアン氏の考案した自殺幫助装置で死亡した。同氏は、これまでに安楽死を希望する末期がん患者20人の自殺を手助けし、3回に渡り殺人罪で逮捕されている。いずれも不起訴処分となったが、彼は医師免許を剥奪された。社会では売名行為という批判も大きく出た。現在、アメリカで論議を呼んでいる安楽死の問題を、キボキアン氏へのインタビューを交えながら明らかにする。ジャネット

さんがもっとも恐れているのは、アルツハイマー病の症状が進んで、いつかは自分自身で死の選択すらできなくなるのではないかということであった。

「人は死を選択できるのか (2)スーの闘った18ヵ月間」〔1994年9月5日・ETV製作、1994年/カナダ・45分〕カナダ在住の女性スー・ロドリゲスさん(1950年生まれ)は、筋肉の萎縮と麻痺が進行していく病である筋萎縮性側索硬化症(ALS)という難病にかかった。医師は余命2年と判断。彼女は自分の意識の確かなうちに医師の補助で自殺することを強く望んでいた。やがて「死ぬ権利を守る会」のメンバーと共に法律改正を求める法廷闘争を始める。これによって彼女は、教会と国家の倫理規範に挑戦することになった。難病を抱え法廷闘争をする彼女の存在は、マスメディアの注目するところともなる。弁護士は「健康な人が自殺すること(一種の自己決定権の行使)は違法ではなく、病気の人が自殺の補助を求めるのが違法である」とするのは違法であるという論法を立てて法廷に臨んだが、延命派の力も強く、一審、二審と立て続けに敗訴した。弁護士は直ちに最高裁に上告した。スーの病気は確実に進行し、彼女に残された時間も残り少ない。だが、死ぬための闘いが彼女に力を与えている。1993年5月20日、最後の裁判の日を迎えた。最高裁判所が法廷でのテレビ撮影を許可した。裁判では、賛成派・反対派それぞれ8つの団体が意見陳述をした。判決は4ヵ月後に下されることになった。9月30日、裁判所からの電話が入った。上告は5対4で却下された。

「記憶が消えていく～あるアルツハイマー病患者の告白～」〔1999年5月9日・BS1・50分〕

「死はだれが決めるのか～(1)キボキアン3度目の判決(2)わが子の命」〔1998年8月23・30日・ETV・45分〕これまでの医学では一日でも長く患者を生かすこと〔延命医療〕が最大の目的だった。しかし、医療技術の進歩とともに「生命」や「死」に対する人々の認識が変わ

りつつある、否むしろ常識をもう一度疑ってみる必要もでてきている。世界の幾つかの国では安楽死を是認する考えも生まれつつある。「死の迎え方を選ぶ権利」を考えるシリーズ。

(1)キボキアン3度目の判決(1996年・米)～「自殺装置」の発案者で、死を希望する患者の自殺を助けたとして裁判にかけられているジャック・キボキアン元医師。医師や倫理学者との対話、自殺する前の患者、その家族の証言などを基に「キボキアン裁判」をめぐる安楽死についての論点を検証する。

(2)わが子の命(1996年・英・BBC)～安楽死が違法とされるイギリスで、人道的見地と法律の間で悩む夫婦の姿を描く。スチュアート夫妻の2歳になる子どもイアン君は、回復の見込みのない脳の重度の損傷のため苦痛に満ちた日々を送っていた。苦痛から解放するため、両親は安楽死を望んだ。自分の生き方を決める能力を持たない患者の運命を、本人の意思に代わって家族が選択することは許せないことなのか。両親の苦悩の日々をカメラは克明に追う。⇒関連新聞資料『毎日新聞』1998年12月1日(22面)―追跡メディア:「安楽死ビデオ事件 米国内で論争「人の死」報道どこまで」(要約)キボキアン医師(70)が、自ら撮影した安楽死ビデオを、米3大ネットワークのCBSテレビが同社の報道番組「60ミニッツ(60分間)」で放送した是非をめぐる米国内で激しい論争に火が付いている。同医師が致死量の薬物注射で患者を死なせる衝撃の場面が茶の間に流れ、宗教界などからは「CBSは視聴率稼ぎのための人を見せ物にした」と批判の声が上がっている。「報道の自由」の原則のもとで、メディアは、人間の死をどこまで報道できるのか、明確な答えを見つけるのでは容易ではないようだ。番組のスポークスマンを努めるケビン・テデスコ氏は次のように述べている。安楽死ビデオの放映の是非を局として議論したかという質問に対しては、番組製作とCBSのトップがビデオを見て放映を決めた。安楽死は重要な国民的課題であり、ビデオの内容はまさに

その議論の中心部分に直結している。放映が国民の意見形成に役立つと考えたと答えている。テレビは殺人や自殺をニュースとして報道するが、これまでは本当に人が死ぬ瞬間の映像を流すことは避けてきた。米ジョージタウン大学のダイアナ・オーウェン教授(メディア学)は「多くの人に、死が見せ物となることに対する強烈な反発があるからだ」と説明する。今回の安楽死ビデオ放映について、同教授は「報道の自由との兼ね合いで非常に判断の難しい問題だ」と前置きしながらも、「放送にふさわしいかどうかの判断は、まさにCBS自身が行うべき性質の問題だ」と強調している。

⇒関連新聞資料『読売新聞』2000年11月29日(1面)：

「安楽死 合法化、オランダ下院通過へ」オランダ下院は28日、医師による安楽死を認める刑法改正を盛り込んだ安楽死法案を賛成多数で可決する。上院での可決も確実で、年内にも成立する見込み。国家レベルで安楽死が合法化されるのは世界初。オランダではすでに安楽死が事実上、広範囲に認められているが、これまでは形式上医師も囑託殺人で書類送検されていた。まだ同法案は12歳以上の未成年者にも安楽死の権利を認めており、これも世界的に類例がない。この法案の骨子は①患者の自発的意思②耐え難い苦痛③治癒の見込みがない④担当医師が第三者の医師と相談—などの条件を満たす安楽死について、医師の刑事訴追免除を刑法で定めるといった点になる。また、こん睡状態などで意思表示が出来なくなる事態に備え、患者が事前に安楽死希望を表明すれば、医師は原則として、患者の希望に従わねばならないことも条文化されている。安楽死合法化は、オーストリア北部準州(1995年)や米国オレゴン州(1997年)の州レベルで成立したことはあるが、いずれも連邦議会が「違法行為」として無効法案を可決している。

「シリーズ・死について考える (1)安楽死 (2)脳死移植」[2001年2月21/22日・ETV『にんげんゆうゆう』各30分] (1)では、オランダ

で安楽死を選択した日本人女性を特集する。ネーダーコルン靖子さんは、長年オランダで暮らし、日本人学校の設立にも尽力したが1997年にがんで亡くなった。同国で厳しい条件つきで容認されている「安楽死」を選んでの最期であった。靖子さんは、病床の中で読み続けた歌集「オランダはみどり」(ながらみ書房)を出版。死に至るまでの素直な心情が綴られている。

「未知なる生命・ヒト (6)ハービー安らかに」[2000年2月18日・ETV・45分、制作：BBC/ラーニングチャンネル/英 1999年] 末期がんの英国人ハービーさんは「自分は映像を見られないが、人は病氣と戦うことで充実した人生を送れることを多くの人に知ってほしい」と自らの死を記録、撮影することに同意した。自宅療養を続けたハービーさんは数カ月後、家族に看取られながら63年の人生に終止符を打つが、死とは分からないほどの「最期」がカメラに収められている。英国では1998年に放送され、特に最終回の死のルポが大きな話題となった。番組の購入にあたったNHK マルチメディア局によると、現地では番組開始前は「死」を放送することに視聴者から抵抗があったが、実施の放送後は、「死の尊厳を感じた」との声が相次いだという。「このシリーズの大きな魅力はBBC が出演を公募した視聴者が自らの生身の体験を撮影させていることだ」と同局の亙理正雄・メディア展開部統括担当部長。〔中略〕亙理担当部長は「自分の人生を重ねて見られるような構成が特徴。どの世代の人にとってもそれぞれの見方があるはず」と話している。〔参考資料：『朝日新聞』2000年1月8日〕

「『世紀を越えて』を読む～安楽死・死の自己決定権は可能か～」[2000年9月7日・ETV・45分] 医師の視点は二つある。いかに末期の患者であれ、可能な限り延命の努力をすべきであることと、治る見込みのない患者の肉体的苦痛を取り除いてやるという視点である。後者の視点は、かつてのナチスのそれに微妙に重なってくる。ナチスは、

知的障害者などは生きてることそれ自体が苦痛なのであるから、死んでしまったほうが彼らのためになると考えた。だから、彼らのために思って、痛みのない方法で殺してあげるのだと考えた。ナチスが障害者の「殺戮」のことを「安楽死」と呼んだのは、言葉による事実のカムフラージュのためであったことは想起しておかなければならない。苦痛を伴う「延命」か、死なせることによる「苦痛」の除去か—どちらも患者への共感・思いやりに根ざしているとすれば、その選択の基準はどこに置くべきか。その時に患者側の自己決定権という考えが、重い意味を持つことになる。もし、患者の視点に立って、いつ死ぬかを自分で選択できるとすれば、問わねばならないことはいくつかある。自ら死を選ぶのは生きつづけることへの絶望からか、耐えがたい肉体的苦痛からのがれるためにか、あるいは十分自分自身で生をまっとうできたという充足感を持ってなのか。理想的に言えば3番目であろう。いずれにせよ、この問題は演習などで学生と議論を戦わせてみたいところである。

1991年、神奈川県某の病院で医師が薬物を注射して末期がん患者を死なせる事件があった。横浜地方裁判所は、判決の中で「積極的安楽死」を認める4つの条件を示した。①肉体的苦痛があること、②死期が迫っていること、③苦痛を取り除く方法がないこと、④患者本人の明確な意思表示があること。先の事件では、④の条件が欠落していたために被告の医師は有罪となった。その後、安楽死が認められたケースは現在のところ日本ではない。

3 性が揺れる現代社会

かつてナチス・ドイツは、1936年の「ベルリン・オリンピック」を頂点とする形で健全な社会建設と、国民の健康な生活の向上を標榜し

ていた。ミュンヘンではドイツ民族の栄光を宣伝するために「大ドイツ展」が開催され、美術展会場には、健康な肉体美を礼賛する作品が所狭しと陳列された。だが、それと同時に「頽廃芸術展」が開催され、表現主義などの絵画は、不健全・病的・頽廃的というレッテルを貼られ、多くのユダヤ人芸術家の作品とともに、戦費調達のために海外に売却された。健康な肉体、優秀な子孫の繁栄のための諸政策（妊婦のがん予防検査など）が推進される一方で、障害者や同性愛者の社会からの絶滅政策が密かに同時進行していた。

筆者は現在、法学部において学生指導員という役割を担当しているが、今のところ直接的な事例として、性あるいは性差にかかわる問題を持って訪れた学生には出会っていない。もちろん、そうした問題が学生同士で相談し合える範疇の問題である限りは、あえて教員にまで持ち込む必要のないことであろう。もし抱えている問題がかなりの程度深刻なものである場合には、友人にも家族にも、まして教員にも話せない内容のものであろう。もちろんそうした性／性差にかかわる問題は個別的な事情があるにせよ、今日本社会の中でそうした問題が数量的にあるいは統計的に扱うとどのような特徴が見られるか、我々が生きる現代の日本における傾向について知っておくことも個別の問題と取り組む前提として必要であると考え。

「揺れる男と女」～NHK『性に関する全国世論調査より』～〔2000年4月17～20日・ETV・4回シリーズ 各45分〕NHKでは、少子化に象徴される日本社会が抱える問題を探るために、日本で初めての「性に関する全国世論調査」を1999年12月に実施した。全国の16歳から69歳まで3600人を対象にした調査からは、時代の変化とともに変わる日本人の性の姿が明らかになってきた。「性」を世論調査の結果を通して見つめることで、新しい時代の男と女の間関係をゲストとともに4回シリーズで考えていく。

「第1回 中絶経験43%～避妊ができない夫婦関係」〔4月17日〕調

査の結果、妊娠経験のある女性の43%が中絶を経験していることが明らかになった。避妊を口に出せない女性と、女性の体について深く考えない男性。中絶を通して男女の意識のずれの違いについて考察する。

「揺れる男と女」～NHK『性に関する全国世論調査より』～第2回
性的被害33%～夫婦に潜む性暴力」[2000年4月18日・ETV・45分] 何らかの性的被害を受けた女性は33パーセント。特に夫や恋人などから受ける性暴力が問題になっている。男と女が互いに理解し合う方策を考える。

「夫の暴力と闘う～アメリカ・立ち上がる妻たち～」[1997年11月2日・BS1・60分] アメリカでは毎日4人の女性が家庭内暴力で命を落とし、その数はベトナム戦争の戦死者を上回るとさえ言われ、夫や恋人による暴力を逃れてシェルター(避難所: 駆け込み寺)に暮らす女性は全米で3万人とも5万人とも言われている。DV、いわゆる「家庭内暴力」は日本でも問題になっているが、他者や既存の法律制度が介入しにくい側面もあり「静かなる暴力」とも言われている。よくある事例では、アルコールが引き金となり人格が変わってしまうことである。もちろん世の中の男がすべて「ジーキル博士とハイド氏」であるわけではないが、パートナー選びの難しさを示している。

私見では、DVは我々の日常に潜んでいる「ホラー[恐怖]」である。ホラーは「いじめ/いたぶり」であり基本的にはサディズムである。そしてホラーはしばしば「閉ざされた空間」で起きる。そしてまさに家庭は閉鎖空間そのものであり、人間同士の力関係も平等ではない。もっとも精神的なダメージを受けるのは両親の喧嘩を見て育つ子どもたちである。彼らは将来、健全な人間関係を形成できなくなるかもしれない。他方、企業の中で働く男性が、多くのストレスをため込んでおり、どこかでそのガスが爆発しかねない状況であることも確かであり、また相手が家族であるが故にそしてまた、自らの私有物と錯覚された家族の構成員に対し感情がむき出しになりやすいが故に、潜

在的なストレスの捌け口が身近な人間に向けられやすいということは言えるだろう。番組の中で暴力をふるった男性のインタビューに共通しているのは彼ら自身が暴力的な家庭に育ったと告白していることである。暴力の引き金として、酒や麻薬、テレビの暴力シーン、強い父権への回帰願望、人間の本源的な独占欲などが指摘されているが、はたしてDVは「予防措置」や「予見」そして「全学習や認識」が可能なのだろうか。番組ではアメリカの警察が従来の「民事不介入」の原則を越えたDVに対する具体的な取り組みや、学校教育における取り組み、そして父親たちの「自己抑制」ミーティング（男性救援センター）の様子についても紹介されている。

「シャイニング」(‘The Shining’ 1980年・米) 監督：スタンリー・キューブリック、原作：スティーブン・キング、出演：ジャック・ニコルソン。コロラド・ロッキーの大ホテルに小説家のトランスと彼の家族が冬期の留守番のためにやってくる。だがここは前任者の管理人が家族を殺し、自分も自殺したいわくつきのホテルだった。トランス一家は次第にホテルの持つ不気味な魔力にとらわれていく。原作者のS・キングは「モダン・ホラー」の鬼才と言われ、また彼の多くの作品が映画化されているが、彼の作品の特徴は、物語の出だして何の変哲もないアメリカの日常の生活風景が次第に変容していく不気味さの一つの特徴であり、その点では、現代社会に潜在的にあるDVの可能性を象徴しているともいえる。(143分)

「揺れる男と女」～NHK『性に関する全国世論調査より』～第3回
性体験36% ～性教育のジレンマ」[2000年4月19日・ETV・45分] 16～19歳のセックス経験率は36パーセント。性の低年齢化が進む中、新しい性教育を模索する教育現場の取り組みを交え、世代を越えた性との向き合い方を探る。

「揺れる男と女」～NHK『性に関する全国世論調査より』～第4回
セックスレス19%～日本社会は変わるか」[2000年4月20日・

ETV・45分]性交が月に1回未満というセックスレスの割合は、20代から40代で19パーセントにのぼる。シリーズの最終回は、セックスレスについて考えるとともに4回を総括し、新しい男女の関係を築く道を探る。

数年前に男性の性的能力を高める薬としてバイアグラが世間の耳目を集めた。厚生省は異例と思える速さで日本に導入した。一方、ピルの解禁には数十年の時間がかかっている。これは厚生省の官僚の大多数が男性であることと無関係であると言えるだろうか。いずれにせよ、たてまえとしての男女平等と実質的な意味での平等との隔たりの存在は、これからもさまざまな形で折りにふれて顕在化していくであろう。

「世紀を越えて・シリーズ 絆・ともに生きる 第4集 男と女～多様化する結婚のかたち」[2000年5月31日・NHK・50分] 元気に働き、何でも知っているパパと、優しく貞淑でテキパキと家事をこなす専業主婦のママ。アメリカのテレビドラマなどで理想として描かれてきた20世紀の家族像が今大きく変わろうとしている。アメリカでは、初婚夫婦の2組に1組が5年以内に離婚し、その7割が3年以内に新たな相手と再婚するという。こうして誕生した子連れの新婚家族は「ステップ・ファミリー」と呼ばれ、21世紀のアメリカの家族の主流になると言われている。一方フランスでは結婚という制度に縛られない男女の結びつきが主流となってきている。フランス全国で5組に1組、パリでは3組に1組が結婚という制度にとらわれない「事実婚」のカップルといわれる。そのためフランスでは、法的には独身扱いだった事実婚のカップルに対し、双方が契約すれば税金や相続の面で結婚と同程度の扱いとするという法律「PACS [パックス]」が成立しようとしている。この法律は、事実婚だけではなく、同時に同性愛者のカップルの権利も認めようというもので、国を二分する議論が続いている。こうしたアメリカやフランスの潮流は、近い将来、日本にも必ず波及すると考えられる。日本の大手広告代理店が掲げている21世紀の日本

の家族を表現したキャッチフレーズは「連立家族」。夫と妻がそれぞれ独立して適度な距離感で結ばれていく家族を表現したものだという。家族がそれぞれ努力して築き上げていかないと、家庭は壊れてしまうというのだ。離婚や再婚、事実婚が急増し、変わり続ける男女の絆。番組では、従来の家族観、結婚観が揺らぐなか、幸福を求めて様々な絆のあり方を模索する男と女の姿を通して、多様化する家族の姿を見つめる。

「変わりゆく家族像 (3)シングルマザー～精子が売買されている」

[1997年10月30日・ETV・45分、制作：グッド・スープ・プロ／カナダ・1995年] アメリカの精子銀行を訪れる女性が増えている。ここでは自分の好みや将来の理想に適した「精子」を購入することができる。銀行と精子提供者との間では、将来子どもの親権を要求しないことなどを明記した契約書が交わされる。もちろんエイズ検査は正確に行われているので安全な精子を買うことができるようになっている。精子提供者は、ヌード雑誌の助けを借りて自ら取り出した約3ccの精子に対し50ドル〔約5万円〕の報酬が得られる。だが、精子提供者は自分の知らない所で自分の子どもが複数生まれていることに複雑な心境であるが、提供者のある妻帯者の場合には、月400ドルの臨時収入を得られることに妻も納得しているという。カード時代は、子どもまで買うことが可能になった。1981年にはアメリカで「自ら選んだシングル・マザーの会」が設立され全国規模に拡大している。生物の世界では、子孫ができればもはや雄の役割は終わる。カマキリの場合はオスはメスに食べられて、新たに生まれてくる子どもの栄養になるとのこと。長い間男性優位で築かれてきた人間の歴史は、これからはもしかすると生物界と同じレベルで、男女平等社会が出来上がるかもしれない。そうなると、世の男性が一人につき2個ずつぶら下げているものは、もはや不要となり盲腸のように退化するのだろうか。いずれにしても「恋愛から結婚そして、二人の愛の結晶としての子ども」とい

う既存の麗(うるわ)しい価値観が揺さぶられているのは確かなことである。

「**ガープの世界**」(‘The World according to Garp’ 1982年・米)
製作/監督:ジョージ・ロイ・ヒル 出演:ロビン・ウィリアムズ、
グレン・クロース、ジョン・リスゴー。1978年に発表されて大きな反響を巻き起こしたジョン・アービングの自伝的小説『ガープの世界』は、アメリカだけでも500万部以上売れたというベストセラーである。第2次大戦中、野戦病院の看護婦をしていた主人公ガープの母親となる人は、一人の傷病兵の性器が硬直したままの状態であることを知り、ある時彼の上に一方的にまたがり、挿入された性器に数分間刺激を与えた後に無事に精子を受け取り、やがてガープが誕生する。その出生からして衝撃的とも言えるガープは、波瀾に満ちた青春を過ごし、やがて妻子を持ち有名な小説家となる。全体に「泣き笑い」といった意味でのペースに満ちた映画である。一方母親は、女性解放運動の闘士となるが、ある野外集会での演説の最中に、反対派の狙撃ライフルの凶弾に倒れる。人情の機微の細やかを表現できるR・ウィリアムズの演技の卓抜ゆえにこの映画は秀作となった。(137分)

「**世紀を越えて シリーズ 絆・ともに生きる 第3集 ウーマン～豊かな国の静かな革命**」[2000年5月24日・NHK・50分] 今アメリカでは、あえて結婚せず、自らの意思で精子バンクなどから精子を買取り、出産するシングル・マザーの道を選ぶ女性が増えている。「シングル・マザーズ・バイ・チョイス(自ら選んだシングル・マザーの会)」と呼ばれるこうした女性には、子どもを一人で養うのに十分な経済力と父親なしで子どもを育てる強い責任感が要求される。現在こうした女性は全米に少なくとも5000人はいると言われている。20世紀「男女平等」のキーワードの下で、男性との格差を縮める模索を続け、様々な選択肢を獲得した女性たち。女性は「避妊・中絶」の権利を勝ち取り、自らの身体をコントロールするテクノロジーを手に入れ、社

会のあらゆる分野に進出するようになった。シングル・マザーは女性が手に入れた究極の選択肢だと言えるだろう。だが、いまでこそ「男女平等」が尊重されるアメリカでも60年代までは、女性はあらゆる分野で雇用差別を受けてきた。その差別を撤廃する契機となったのが、全米最大の電話会社ベル・システムに勤めていた一人の女性の訴えだった。当時ベル・システムでは女性はオペレーター、男性は現場の仕事と決められ、職場も別々に別れていた。この女性は給料の高い現場に移りたいと訴えを起こし、自分の主張を会社側に認めさせた。この制度改革を機に、全米で雇用差別が撤廃されていったのである。番組では、アメリカを舞台に今世紀、女性が社会に大躍進を果たした歴史をたどりつつ、教育、ファッション、ライフスタイルなど、さまざまな面で変わりつつある「女と男の絆」の行方を探る。

「コード」[1999年・米] 監督：シドニー・J・フューリー。タイトルの「コード」とはヘソの緒 (umbilical cord) を意味する。主人公のアン (ダリル・ハンナ) は敏腕実業家の夫と幸せな生活を送っていた。2人の願いは元気な赤ちゃんを授かることだった。彼女は産婦人科を訪れ人工受精を受ける。しかし、数日後、夫が仕事で出張中の夜にアンは何者かに襲われ、見知らぬ地下室に監禁されてしまう。アンを監禁したのは産婦人科の医師フランクとその妻ヘレンだった。アンのお腹が次第に大きくなるのに比例して、この二人の狂気もエスカレートしていく。

「男女の平等と共生」[『男と女の生活学』2000年4月21日・ETV・30分] 今、日本社会で働く人の中で女性は約4割を占めているという。この番組の講師の一人を努める仲田郁子さん (千葉県立柏北高校教諭) は、2000年1月にオープンした東京・港区の「女性と仕事の未来館」を訪ねる。この施設は、労働省が働く女性や働きたい女性を支援するために作られた。女性と仕事に関する図書館。コンピューターを使った働く女性の悩み事相談システム。電話やEメールを使って月

におよそ300件の相談も寄せられている。内容は、転勤、セクハラ、復職などさまざまである。日本国憲法では男女の平等は理念的に保証されているものの、現実の社会ではまだまだ多くの性差別が存在しているのが実状である。また「男らしさ・女らしさ」という社会通念それ自体も今問われようとしている今、社会や家庭における女性と男性のあり方について考え直す時代を迎えている。「セックス」は生まれた時に既に決まっている性別で、「ジェンダー」は育てられる過程で身につけていく文化としての性別を示す。「活発／やさしさ／たくましさ／自己主張／しとやかさ／控えめ／かつ弾力／気配り／包容力」という言葉を、「男らしさ」と「女らしさ」へ区分してみるという、ジェンダーをめぐるスタジオでの実験は興味深い。

「男と女の境界線～その性をとりもどす時～」[1998年6月22日・ETV・45分] 自分が男である理由／女である理由はーと問われたとすれば、一般的には性別の理由としてまず身体的特徴をあげるだろう。だが、体が男なら、心も男なのか、また体が女なら、心も女なのかーこうした社会的常識としての「性の決めごと」に今疑問が投げかけられようとしている。「性同一性障害」(心体の性的不一致)については、すでに欧米では30年前から医学的治療の対象になってきた。1998年5月12日、埼玉医科大学の倫理委員会は、性転換(トランス・ジェンダー)手術を条件つきで認めることを決定した。実際に悩みを抱える人は10代から50代などさまざまである。我々はこうした問題から目をそらすわけにはいかない。

「ボーイズ・ドント・クライ」(‘Boys Don’t Cry’ 1999年・米) 監督: キンバリー・ピアース。1994年衝撃的な新聞記事が女性監督ピアースの目に飛び込んできた。その前年ネブラスカ州フォールズ・シティで二人の女性の死体が発見された。被害者の一人ブランドン・ティナーが実は自分の性に適応できない性同一性障害の女性だった。短く刈った髪にカウボーイハット。だれもが男だと思っていた。2000年の

アメリカ・アカデミー賞で主演女優賞を受賞したヒラリー・スワンクが演じるブランドン・ティーナは、気持ちは男性なのに肉体は女性という心と体の食い違いに苦しんでいた。ピアース監督はインタビュー記事の中で次のように述べている。「一万ページに及ぶ裁判記録をすべて読み、報道資料にも目を通した。性同一性の問題は決して新しくはない。社会の底に沈んでいた問題が表面化してきたのだと思います。」映像メディアという表現手段は時として、自分の知らない世界をかいま見させてくれるという意味でも、絶えずスリリングな発見に満ちていることを伝えてくれる一作である。

社会の中でマジョリティーの一員として生きている時に、自分の視野に入ってこない問題が実に多くあることに気づく。危険な言葉と知りつつあえて用いるが筆者のように「人並み」の結婚をして、二児の父親として生きている時に、性同一性障害に苦悩する人の存在は自分からあまりにも遠い位置にある。安易な同情心を持つ気はないし、かと言って不潔であるとか生理的嫌悪感はもちろん抱いてはいない。しかしながら、「人並み」という絶対的多数原理が揺らぎ、生き方の多様性がお互いの共通認識となりつつある現代社会の中で、自分では決して生きられない別の生き方のありように目を向けてみるだけの心の余裕だけは持ちたいものである。その意味では次に引用する16歳の女性名の投書は十分考えてみる価値はある。

「レズビアン」略さずに呼ぶー先月27日、東京で3年ぶりにレズビアン&ゲイパレードが行われ、2000人を越える同性愛者と共に、私もプライドをもって行進しました。同じ日の声欄に「他人扱いのレズの私たち」との見出しの投稿が掲載されていました。投稿は、レズビアンのカップルが異性愛が当たり前の社会で生きることの困難さを描きながら、レズビアンとして生きていくことへの自信も感じさせ、共感を覚えました。しかし、見出しの「レズ」という省略語には違和感を感じずにはいられませんでした。一般的に省略語は相手の軽蔑を示す

ことが多く、男性同性愛者については「ホモ」という省略語は使われなくなってきています。しかし、女性同性愛者を「レズ」と呼ぶことが差別になるとの認識が少ないのはとても残念です。「レズ」は、女性同性愛者を否定的に表現したり、性的興味の対象として見る時に多く使われてきました。だからこそ、私たちは自分たちをレズビアンと呼ぶのです。「レズ」という言葉が安易に使われているのを見ると、憤りを覚えざるを得ないのです。私は、相手がどう呼ばれたいかに気を配ること、レズビアンを略さずにレズビアンと呼ぶことは最低限のマナーだと思います。それは女性同性愛者がプライドをもって生きてゆける社会への第一歩であり、異なった文化的背景を持つ人たちと共に生きる社会をつくっていく上でも、とても大切なことだと思います。

〔出典：『朝日新聞』2000年9月27日「声」、投稿者は16歳の女性名〕

日本社会では、まだまだ「男らしさ・女らしさ」という社会的ジェンダーの束縛は強いと言える。だが、男性・女性ともどもに社会的束縛という息苦しさを少し取り除いて、より風通しのいい社会を作るための運動として「ジェンダー・フリー」が提唱されてきている。もちろん、これは社会の倫理的規範の破壊を意味するものではない。言葉ではうまく説明できないが、日本社会特有の窮屈さや、根拠のはっきりしない偏見や差別が存在することは否定できないのである。

ここで映画表現の歴史に目を転じると、男性同士であれ、女性同士であれ、同性愛が明確な主題となって正面から表現されることはなく、むしろ暗示的に表現されてきた。例えば映画史上に残る名作「アラビアのロレンス」(1962年・米)では、主人公である実在の人物T・E・ロレンス(1888-1935)が決定的に性格に変化を遂げる事件が描かれている。それは、彼がアラブ反乱軍を率いて支配者のトルコ軍を追いかけていく過程の中である日トルコ軍の駐屯地に偵察にでかけ逮捕された時に、ひどい拷問を受けたことである。映画ではきわめて暗示的にしか描かれていないが、この夜ロレンスはトルコ軍司令官との間で

何らかの性的関係があったことは、彼の自叙伝「知恵の七柱」に記述されている。この映画を見た大多数の観衆はおそらく気づかなかったことである。明らかに、映像表現には限界が存在していたことはまぎれもない事実である。これからの時代にそうした性愛がどこまで明るさの中で語られうるようになるか、筆者の予測の範囲を越えるが、少なくとも以下に紹介する数本の映画作品が重要な手がかりを与えてくれるはずである。

「セルロイド・クローゼット」(‘The Celluloid Closet’ 1995年・米)
監督：ロブ・エプタイン、ジェフリー・フリードマン。クローゼットは「押し入れ」の意味で、「セルロイド」は映画のフィルムを意味する。この映画は「夢の工場・ハリウッド映画」がこれまで同性愛表現をどのようにしてきたかを検証する映画である。映画の表現の歴史を検証する映画は、同後反復(トートロジー)を避けるために人為的に作り出される、対象としての言語を語る言語としての「パラ言語」になぞらえると、「パラ映画」とでも呼ぶべきユニークな映画であるということができよう。映画の中で登場する映画は120本。同性愛を公然と主題にすえることができるようになった「真夜中のパーティー」(1972年)以後の現代より、それ以前の時代にハリウッドの検閲をかいくぐり、監督や脚本家、俳優たちがいかにひそかに同性愛表現を伝えていたか、証言とともに紹介される。1895年に撮影されたトーマス・エジソンの実験映画の中で男性二人がダンスをするシーンなどは大変興味深いものがある。レズビアン映画「噂の二人」(62年)で、オードリー・ヘプバーンと共演したシャーリー・マクレーンは「当時はテーマの深刻さにはまったく気づかずに無自覚に演技していた」と率直に反省する。「ベン・ハー」(1960年)における隠れたストーリー展開や、スタンリー・キューブリックの「スパルタカス」(1960年)で削除されたシーンなど、映画史的にも貴重な場面がいくつか現れる。ハリウッド映画が、単なる大衆娯楽としてではなくキリスト教会などが

提唱する公衆道徳や体制維持のための社会浄化論をきっかけとして成立した自己検閲制度により、ハリウッド映画が、映像表現のために「カモフラージュ」の技術を身に付けたことはもう少し注目されてよいのではないだろうか。この映画のナレーションを引用するならば「ハリウッドは、表現について行間の使い方を覚え、観客はその読み方を覚えた」とある。つまり、この映画は映画を読み解くためのメディア・リテラシーを形成するための良質の教材ともなりうるだろう。もちろん映画は、一面においては豊かな精神世界を形成することもできるし、また効果的な大衆操作の手段にもなりうるという宿命的とも言える光と影の両面を前提としていることは言うまでもないが。

「真夜中のパーティ」(‘The Boys in the Band’ 1970年・米) 製作／原作／脚本：マート・クローリー、監督：ウィリアム・フリードキン。ゲイ・パワーが脚本を浴びはじめた1970年前後にオフ・ブロードウェイで評判を取った芝居の映画化。主人公は男ばかり8人、ホモの男たちがパーティを開くが、偶然やってきたホモではない男を仲間に加えたばかりに、楽しいはずのパーティは次第に混乱し陰悪なムードと化していく。ホモ特有の細やかな思いやりや嫉妬など、感情の微妙なヒダや流れを追った心理劇であるが、孤独や愛情など普遍的人間性のドラマとして見ることができるまでに深く掘り下げされている。また、会話の中のジョークの屈折した面白さも見逃せない。オフ・ブロードウェイのキャストがそのまま映画でも同じ役を演じている。本物のホモではない男アラン役のピーター・ホワイトを含め8人までが実生活でもホモだというのが、しぐさや言葉遣いから見るからにゲイのエマリーに扮するクリフ・ゴーマンのみが実生活ではホモではない、といったように出演者たちの、それまでは隠されてきたはずのそれぞれの性愛観が明確にされているのも、1970年代以降の社会の受容性の変化を示していると言えるだろう。(120分)

「ベントー墮ちた饗宴」(‘Bent’ 1997年・英) 監督：ショーン・

マサイアス、出演：クライブ・オーウェン、ロテール・ブリュトー、ミック・ジャガー。舞台演出家として名高いショーン・マサイアスは、マーティン・シャーマンの戯曲の映画化で監督デビューをはたした。この作品は、ヒトラーが世界を震撼させる前夜のベルリンの頹廢的なクラブから始まる。人間の自由と尊厳を侵すナチス・ドイツの暴力と、極限状況に追い込まれても決して屈することのない人間の愛の力を、二人の同性愛者の姿を通して描いている。これまであまり知られていなかったが、ナチスはユダヤ人だけではなく、民族を破滅に導く兆候であるとして、政治犯、ロマニ（かつてはジプシーと呼ばれた移動生活をする人々）、同性愛者を強制収容所に送った。彼らは囚人服にピンクの逆三角（ピンク・トライアングル）をつけさせられ、最も軽蔑された。収容所で二人は、生き延びるために必死の努力を続けるが、ある朝ひとつの事件が起こる。過酷な状況下でプラトニックな愛をつらぬく二人のゲイを、オーウェンとブリュトーが感動的に演じた。(105分)

4 テクノロジーの暴走、SFの予見性

かつて、レオナルド・ダ・ヴィンチはヘリコプターの設計図を描き、ヴェルヌは海底旅行や宇宙旅行を空想し、そしてH・G・ウェルズは未来の高度に管理された社会の恐怖を予見した。そしてそれらはすべて実現された。現在、SFが予見すること、それもいつの日にか実現される潜在的可能性をつねに秘めている。

「ジュラシック・パーク」(‘Jurassic Park’ 1993年・米) 監督：スティーブン・スピルバーグ、原作／脚本：マイケル・クライトン。(アカデミー視覚効果賞ほか受賞) はるか昔に絶滅した恐竜たちが現代によみがえったらどうなるだろうか。破天荒なアイデアを遺伝子工学に

基づいて描き、ベストセラーとなったM・クライトンの原作を、S・スピルバーグが特殊技術の粋をつくして映像化した作品。古代の琥珀の中の蚊から恐竜のDNAを抽出しバイオテクノロジーによる恐竜の再生が成功した。コスタリカ近くの小島に建設中の「ジュラシック・パーク」は、よみがえった恐竜が歩き回る史上最大のテーマパークになるはずだった。モニターとして3人の学者とふたりの子どもが園内を巡るが、コンピューターのトラブルから制御されていたはずの恐竜たちが暴れ出し、肉食恐竜は人間に襲いかかった。(127分)

科学技術によって現代社会によみがえったティラノザウルスの暴走は、同時にまた遺伝子工学(バイオテクノロジー)の暴走をも暗示しているかのようである。クライトンは続編の「ロスト・ワールド」では、「多様性の喪失が種の絶滅につながるかも知れない。とくにコンピューターによる電子ネットワークが日常生活に浸透し、サイバースペースが拡大により世界中の人間が均質化することによって、人間の多様性が失われるかもしれない」と警告している。以下の2つの番組も参照されたい。

「テクノロジーの暴走～作家M・クライトンは警告する～」〔2000年10月18日・『クローズアップ現代』NHK・25分〕人類は遺伝子操作という新しい力を手にした。これは核の力よりはるかに大きな潜在力を秘めている。バイオテクノロジーは人間生活のあらゆる局面を変化させようとしている。医療、食料、健康、娯楽さらにはヒトの肉体そのものも。ものごとは二度と元に戻らない。それは、文字通りこの惑星の様相をも一変させてしまうだろう。そんな力を得た人々は同じ問いかけを口にする。この力をどうしたものだろう。それはまさに科学には答えられない問いかけでもある。クライトンは、バイオテクノロジーそのものを否定しない。ただ、危険な使われ方がされることに警告を発している。かつてのチェルノブイリ原発事故のように、遺伝子操作技術で事故が起きるとすれば、それはどのようなものだろうか。

「SF 作家、アーサー・C・クラーク～地球と宇宙の予言者～」〔2000年3月21日・ETV、製作：BBC/NVC アーツ／イギリス・1997年・45分〕



「人間がコピーされる日～クローン技術の光と影」〔2000年12月15日・ETV、製作：カナダ国立映画協会／カナダ・2000年・45分〕イギリスでクローン羊「ドリー」が誕生してから4年余り。その技術を人間に応用するか否かをめぐって欧米では激しい論争が繰り返されてきた。番組では賛否双方の意見を取り入れながら、現在の問題点を浮き彫りにする。クローン人間の誕生に疑問を投げかけるモネット・ヴァカン（精神分析学者）は番組の中で次のように述べている。「私は精神分析学の立場から、体外受精、遺伝子操作、クローン技術について考察してきました。強く感じることは、それは科学者たちが信奉する技術の一つ一つがまるで子どもの時に聞いたおとぎ話を追いかけて、無批判に受け入れているようだという事です。人間の起源—ヒトがどこから生まれどこへ消えるかという事実が、科学によって曖昧になりつつあります。ヒトは本来、男と女という性、そして親から子へと縦に続く世代によって社会や歴史に根を下ろしています。自分が何者であるかという意識は、性や世代によって確立されるのです。人為的な生殖、とくにクローン技術は、ヒトのアイデンティティの源を危機にさらすものです。」

「ブラジルから来た少年」(‘The Boys from Brazil’ 1979年・英) 監督：フランクリン・J・シャフナー、原作：アイラ・レヴィン 撮影：アンリ・ドカエ 音楽：ジェリー・ゴールドスミス。出演：ローレンス・オリヴィエ、グレゴリー・ペック、ジェームズ・メイソン、ブルーノ・ガンツ、リリー・パルマー。レヴィンの同名小説の映画化で、日本では未公開に終わった作品である。第2次大戦後、ナチスの残党は一部はカトリック教会の手引きなどで世界中に散り、ひっそり

と生活を送る中で、第三帝国の復興を企む者がいた。それはヒトラーの血液を保存していた科学者メンゲレである。彼はその血液をもとに無性生殖でヒトラーのクローン人間を作り出すという恐ろしい計画を立てていた。一方、ナチスによって大量虐殺されたユダヤ人はひそかにナチスの残党を追求していく。今日、医療倫理の中心的問題となっている「クローン人間」について、早くも1970年の時点で映像化されていたことに驚くと同時に、繰り返し言及されるがSFというジャンルの未来予見性を明瞭に示す映画作品となっている。(124分)

「ヒトラーの側近たちⅡ～(2)ヨーゼフ・メンゲレ」[2000年9月29日・ETV・製作：ZDF(ドイツ第2チャンネル)／1998年・45分] ナチス時代、ベルリンのカイザー・ヴィルヘルム研究所では優生学の研究が行われていた。フォン・フェルシュアー教授は双子を使って「生命の暗号」を解読しようとしていた。遺伝子の収集のためには多くの子供を必要とした。彼の弟子メンゲレは絶好の研究の場を与えられた。それはポーランド・アウシュヴィッツの絶滅収容所であった。メンゲレはそこで子どもたちを使って人体実験を繰り返した。細菌を注入したり、臓器を取り出したり、双子を縫い合わせて心臓がどう機能するかなどを観察した。ユダヤ人の粛清が推し進められた時代、医学界もナチスと歩調を合わせていた。ナチスに忠誠を誓った多くの医師たちの象徴ともいえる「死の天使」と呼ばれたメンゲレの生涯から、科学者の罪を考える。また、2000年10月14日『朝日新聞』に掲載された連続する次の2つの記事は大変興味深いものがある。

クローン人間今月にも実行、米国で宗教団体－10日付の米紙ワシントン・ポストは、スイスに本拠を置く新興宗教団体「ラエリアン」がクローン人間計画を今月中にも米国で実行に移すことを明らかにした、と報じた。ラエリアンは最初のクローン人間として、医療過誤により生後10ヵ月で死亡した米国人男児を対象にしており、保存されている細胞を使って男児を「再び親の手に戻す」ことを目指すとしている。

すでに信者50人がボランティアとして代理母になることを志願、米国の資産家が計画への資金提供を申し出ている。ラエリアンの科学部門責任者は「10月中に始めることができると思う」と述べたという。クローン人間は倫理的に許されないとする意見が世論では圧倒的だが、米国には民間のクローン人間研究に対する法的な規制はなく、ラエリアンはクローン人間こそ「永遠の生」へのカギだと主張している。

50州中18州に不備、米国の進化論教育米国の3分の1以上の州で進化論を十分に教えていないことが、カリフォルニア州立大学ロングビーチ校のローレンス・ラーナー名誉教授による全米50州の公立学校の教育課程調査でわかった。論文が英科学誌ネイチャーに載った。幼稚園児から高校生(5-18歳)を対象とした科学教育について授業計画や教科書を調べたところ、進化論教育は6州が不十分、12州が「落第」だった。進化論を教育課程から外したカンザス州は「最低」の評価。米国では神が世界を創造したとの聖書の記述に固執する意識が根強い。進化論は理論にすぎないと教えるところもある(共同)

日本の学生に対して『あなたは進化論を学習したか』という質問設定が意味のあるものなのか、あるいはきちんと答えが返ってくる質問となりうるのか。究極の科学とも言えるクローン人間計画に新興宗教団体が積極的に加担するということから、科学と宗教という長年の二項対立がもの見事に溶解し、そして入り交じるという混沌さに驚く一方、人類にとって科学と宗教は意外と隣り合わせしているのかも知れない、あるいはこっそりと手を取り合って人類の歴史を形成しているのかも知れないとも思うのである。

「命の値段・卵子ビジネスはいま」〔2000年7月7日『ドキュメント地球時間』・ETV・45分〕他人の卵子の提供を受けて体外受精を行う夫婦がアメリカで急増しているという。これに関係する数多くの登録会社ができている。卵子提供ビジネスの実情を伝えるとともに、卵子を購入した一組の夫婦が子供を妊娠するまでを追う。卵子をビジネ

スとして買い集める人は「エッグ・ハンター(卵の狩人)」と呼ばれている。

「メイキング・ベビーズ〜アメリカ・生殖医療の今」[1999年10月16日・BS1、製作：WGBH/1999年・米・50分] カリフォルニア大学の研究所では新しい体外受精の方法が研究されている。それは「ICSI(イクシー)：卵細胞質内精子注入法」である。従来の人工妊娠も含めて毎年2万人の子どもが生まれる。しかし、そのことが生まれてくる子どもにとって良いことなのか疑問視する声もある。ニューヨークに住むスーザン・ヴォーガンとデブ・ワッサーは同性愛者(レズビアン)である。したがって2人とも男性とのセックスには関心がない。だが14年間一緒に暮らしてきた二人は、自分たちの子どもを持つと決意したのである。そのために精子バンクのインターネット情報で気に入った精子を熱心に検索している。カリフォルニアの精子バンクでは提供者の精子を細かく分析し6ヵ月間凍結保存する。遺伝的疾患を持つ人や精子の数が少ない人は提供者になれない。提供者は週2回自分の「精液」を提供し、そのたびに50ドル受け取る。アメリカでは「売血」と同様に「売精液」も認められている。こうして集められる膨大な精子バンクのデータから、インターネットを通じて自分の好みに合った精子を選ぶことができる。映画「タイタニック」がヒットした時には、L・ディカプリオに似た人の精子に予約注文が殺到したという。もちろん、デパートで買った商品のように、生まれてきた子どもを「返品」するわけにはいかない。不妊に悩む夫婦は、子どもを授かるためには金に糸目をつけない。そこにビジネス・チャンスが生まれ、今アメリカでは生殖医療産業が急成長する要因ともなっている。またこうした医療においては医者は妊娠の成功確率を高めるために複数の胚細胞を子宮に戻すことがある。これは早産の原因ともなる「多胎妊娠」の発生が増加することになる。現在、デブの卵子はスーザンの子宮で発育している。急速な進歩を遂げた生殖医療は、従来の妊娠の概念を

変えようとしている。その原動力の一つが子どもが欲しいという人たちの強い意思であることは確かである。

「夫婦で不妊治療 ①原因を探す②妻のための最新治療③夫のための最新治療」〔2000年11月21～23日『今日の健康』ETV・各15分〕10組のカップルのうち、1～2組が不妊と言われている。不妊の男女別原因としては、女性側に原因あり(41%)、男性側に原因あり(24%)、両性に原因あり(24%)、原因不明(11%)とされている。妊娠を望んでも実現しない場合には、不妊の原因をつきとめることが重要となる。妊娠は、男女両者の複雑な条件が整って初めて成立する。原因究明には男女が共に、検査、治療に当たる必要がある。番組では検査内容や治療の実際を解説する。生殖医療の進歩で、排卵障害や卵管障害など女性サイドの不妊治療の選択肢が増え、投薬治療や開腹を伴わない手術も可能になった。不妊原因特定までの検査、障害ごとの治療の実際を紹介する。体外受精や胚移植など、生殖補助医療が適用される条件や妊娠の確率についても丁寧に紹介される。

「デモン・シード」(‘Demon Seed’ 1977年・米) 監督: ドナルド・キャメル、出演: ジュリー・クリスティー。近い将来、人類がもっとも優れたコンピューターを製造したら、逆に人間はそれによって支配されるのではないかという「現実には起こりうる可能性」をドラマ化した異色 SF 映画である。J・クリスティーの演ずる若い人妻をバイオ・コンピューターが襲い、つまり機械が人間の女性をレイプし妊娠させ自らの子孫を残そうとする。(94分)

苦い後味を残す映画である。この映画の主役であるイギリスの女優ジュリー・クリスティーが個人的に熱烈なファンでなければ決して見なかったはずの映画である。筆者は長い間機械のような「無機物質」と生物のような「有機物質」は全く異質のもので両者溶解し合うはずがないという固定観念にとらわれていた。しかしこの映画で扱われるようなバイオ・コンピューターはまさに両者のフュージョンであり、そ

れは進化することによって自らの子孫を残そうとする強い意思と願望を抱き、かつそれを実行する手段に出るということに強い衝撃を覚え、いまだにその衝撃を払拭しきれないでいる。

「インターネットドキュメンタリー・地球法廷『生命操作を問う』～①あなたはどこまで認めますか ②新しいルールはできるのか」[1999年1月15日・BS1 各90分] 近年の先端医療技術や遺伝子研究の急激な発達は「生と死の境界」「老いや病の概念」を根本からくつがえした。人間のクローン化技術も現実の問題となり、研究や医療をめぐる様々な現場で「人権と倫理」を巡る問題が提訴されている。この問題の解決には専門家の議論だけでなく、市民の合意が必要とされてくる。番組で世界初のデータベース「生命操作30のケーススタディ」を制作しホームページで世界に発信し、2日間にわたり討論を繰り広げる。

「インターネットドキュメンタリー・地球法廷『人間・生と死～生命操作を問う』」[総集編・99年3月22日・BS1・90分]

「インターネットドキュメンタリー・地球法廷 ①生命操作を問う～生と死の新たな選択」[1999年8月7日・BS1・90分] 安楽死(終末期医療)、不妊治療、臓器移植、出生前(遺伝子)診断など、人の誕生から死までのさまざまな過程で行われている生命操作に関しては、立場の違いなど様々な意見や考えが併存しているのが現状である。番組では、1999年2月に国内で初めて行われた脳死患者からの臓器移植をクローズアップする。脳死判定を受けた患者の救命治療に最善を尽くしたといえるか、ドナーカードに家族の同意は必要か、そして患者のプライバシーと臓器移植医療の透明性は両立するのかなど、幅の広い意見を紹介する。時間的な制約はあるにしてもこうした視聴者の反応や意見を採用する、いわば双方向性の番組がこれから次第に増えていくことが期待される。

「インターネットドキュメンタリー・地球法廷 ②遺伝子操作を問う

～何をどこまで認められるか」〔1999年8月8日・BS1・90分〕クローン羊ドリーの誕生を機に注目を集めた「生命の設計図」遺伝子。医療現場では病因となる遺伝子の特定により、一部の遺伝性の病気予防に成果を上げている。だが、それは健康な人が将来かかる病気を予測することでもあり、海外では保険加入や就職上の差別が問題化している。番組では世界17か国から寄せられた1000通を越える意見をもとに、遺伝子操作をめぐる人権と倫理を問いなおす。

「検証・クローン人間禁止法」〔00年12月1日『あすを読む』・NHK〕2000年11月に「クローン人間禁止法」が成立した。正式には「ヒトに関するクローン技術等の規制に関する法律」である。この法律は、明治以来初めて法律の説明のために「絵」が使われているほど、単に言葉だけでは扱えない問題であることを示している。この法律の制定までにはいくつかのプロセスを簡単に拾ってみる。1997年2月イギリスでクローン羊ドリーの誕生の発表。同年9月「生命倫理委員会設置」1998年1月「クローン小委員会設置」1999年12月「クローン技術によるヒト個体の産生などについての見解発表」—こうした経過を経て「クローン人間禁止法」成立の運びとなった。同法律で禁止される事例は4つある。(1)ヒト卵子とヒト体細胞からヒトクローン胚をつくること、(2)動物精子とヒト体細胞からヒト性融合胚をつくること、(3)ヒトと動物の混合したものからヒト性集合胚をつくること、(4)動物精子とヒト卵子からヒト動物交雑胚をつくること、そしてこれらを人間や動物の子宮に移植することを禁じた。これに違反すると、懲役10年以下または1000万円以下の罰金が課せられる。「胚」の研究そのものは、届け出制により行政監督下に置かれる。したがって特定胚の研究の道は開かれている。なぜなら、特定胚の研究は「再生医療」「移植医療」の進歩につながるからであるとされる。同法律は、特定胚の作成・研究が、法律による学問研究の自由に対する制限と、単に「指針」とどめた場合の科学技術の暴走への不安との間の均衡を取るのに苦慮して

いることがうかがえる。また、クローン小委員会のメンバー16人はすべて男性で構成されていて、生殖医療にかかわる同法律が、どこまで女性の意見を反映したのか、必ずしも明確ではない。なお、付帯決議として、ヒト受精卵は、生命の萌芽であるとして人間の尊厳が守られねばならないこと、3年以内に同法律の見直しが明記された。

「エイリアン4」〔1998年・米〕監督：ジャン＝ピエール・ジュネ。
出演：シガニー・ウィーバー、ウィノナ・ライダー。映像資料として、この映画を採用するにあたり、アカデミズムの既成概念から離反するかのように見えるが、この映画こそ真先に現代の医学・科学とりわけ医療技術や生命の研究にかかわる人々に見てほしい映画である。なぜならば、この映画では医療技術を含めた科学技術の行き着く果ての悲劇的な状況が描かれているからである。すなわち遺伝子操作技術が進歩しクローン人間を作ることが出来るようになった時代がドラマで想定されているわけであるが、宇宙船の研究室内には正視に堪えないおどろおどろしい姿のクローン人間の失敗作がガラスケースの中に保管されている場面にはめまいにも似た衝撃を覚える。とりわけ手術台に横たわるおよそ人間とは思えない奇形の女性が苦しみの中で力を振り絞って「殺して！」と、医学的に言うならば「積極的安楽死」を主人公のリプリー（S・ウィーバー）に懇願する場面。実験の失敗作の奇形であるにしても「彼女（おそらく）」は「人間の尊厳性」から自ら死を選ぼうとするのである。自分自身もまたクローンであることを知ったリプリーは、エイリアン以上に残酷な人間の仕業に悲しみと怒りの涙をこらえながら、科学技術の非人間性に抗議するかのようになり、研究室に向けて火炎放射器の銃口を向ける。

「金髪ヨハネス～ナチにさらわれた子どもたち」〔1998年9月5日・BS1・80分〕「優秀人種増殖」をはかったナチス政策の傷痕を追う。犠牲者の思いうめきを伝える80分である。「生命の泉(Lebensborn)」というのがこの政策で作られた秘密組織である。ナチスはこの種のネ

ーミングに大変長けていた。もちろんこうしたネーミングは、かつて日本において「らい予防法」という法律のもとに強制隔離された人々の療養所(じつは強制収容所)に「愛生園・楽泉園」などと名づけたことを軌を一にする。ナチスが優秀と信じたアーリア人女性とナチス親衛隊員との「婚外交渉」による子どもを育て、さらに占領国の子供を連行し、ドイツ人化教育を施した。ポーランドから連れ去られて20万人のうち戻れたのは4万人だけだという。番組は、組織で育てられたことを知ったヨハネス・ドリガーさん[54歳]の「自分探し」を軸にする。ノルウェー人の母は、彼が捜し当てる前年に亡くなり、ドイツ兵だった父もラトビアで戦死していた。組織で育った人たち特有の性格を研究者から指摘される場面も。アウシュビッツと表裏をなす政策の犠牲が、声高な糾弾はない。しかし、各地を歩き回るヨハネスさんの姿に当惑と深い悲しみ、そして戦争への強い非難を感じる。日本ではどうだったかとも考えさせる。重量感のある作品である。ナチは人種政策としてユダヤ人絶滅政策のほか、優秀と考えるアーリア人種の「増殖」を画策した。ドイツ軍人と占領地のアーリア系女性との婚外交渉を推奨。金髪で青い目の子供をドイツに連行しエリートに育てようというのである。ヨハネスさんは、4年前ドイツ軍人とノルウェー女性との間の子供と知って、疑問にさいなまれる。長い間つねに苦しんできた得体の知れない心の空洞は何なのか。長女の自殺。二女の家出という家族の不幸とも関係があるのか。母や父はどのように生き、死んでいったのか。そもそも自分は一体何者なのか? 空白を埋めようとするヨハネスさん。その作業を追うカメラは個人の歴史を通し20世紀の業の深さをも映し出しているようだ。テーマと素材が確かなら、あとは事実が語りをはじめ一そんな充実感に満ちた映像が続く。これから不妊治療の技術が進歩し、夫婦から子どもが生まれるという従来の常識が崩壊するとき、成長した子どもたちが、ヨハネスさんのようにアイデンティティーに苦しむという悲劇が繰り返されないだろうか、

大きな不安を抱かざるを得ない。

「ナチズムと医学者の責任～ドイツ遺伝学者ベンノ・ミュラーヒルとの対話」〔1995年11月16日・ETV・45分〕1995年10月、日本生命倫理学会は、一人のドイツ人遺伝学者を招待した。B・ミュラーヒル氏の講演テーマは「優性学から大虐殺へ（ドイツ1933-1945）」。氏は一貫して、ナチス時代の医学者の犯した過ちと正面から向き合ってきた。もちろん国内では氏のそうした活動に対する抵抗も根強かったが、1988年ベルリン医師会は、当時の医師たちの遺伝病断種、安楽死、人体実験への関与を認め、ドイツ人自身の過去とナチズムに関与した医師の責任を明らかにする声明文を出した。ベルリンの壁崩壊の前年のことである。番組の最後で氏は次のように締めくくる。「遺伝子の違いにかかわらず人間は平等である。もう一度正義が裏切られるならば、科学と人類は崩壊するだろう。私たちは、過去の経験を生かさなければならぬし、若い世代も考えなければならぬ。」

⇒関連研究「アメラジアン」

父は沖縄にいた米軍人・軍属、母は日本人女性。「アメラジアン(Amerasian)」と呼ばれる人々が本国に帰って消息がわからなくなった父親をインターネットを通じて捜し出そうとしている。父親探しの窓口になっている沖縄県読谷村の主婦富山マリアさん(31)は最近アメラジアン16人で父親探しや情報交換をするグループを作った。米国向けのホームページも作り、探している父親の写真やメッセージを載せた。富山さんは「自分のルーツを知り、成長した姿を見てほしいだけ。私たちにとって、父親捜しはなくしていた自分のもう半分を見つけること『自分探し』でもあるんです」と話す。ヨハネス・ドリガーさんも、アメラジアンも思いはただ一つなのである。それは自分は、本当に両親に愛された生まれた人間なのかどうかということである。

「お父さんに逢いたい～日比混血児・ミュージカルの旅」〔1999年12月5日・BS1・50分〕日本人とフィリピン人との間に生まれた子ども

もはフィリピンでは「ジャピーノ」と呼ばれ、フィリピン社会の中で差別を受けている。彼らは日本に住んでいる父親探しの旅に出た。ミュージカルの新潟公演で一人のジャピーノは、父親と再会することができた。マニラの日本大使館によると、日本、フィリピン両国の国際結婚で必要となる婚姻要件具備証明の発給件数は、過去10年の平均で年間5000件余りに上る。フィリピン女性の日本への出稼ぎが盛んになるにつれて増えてきた。1995年の約6800件をピークに漸減したが、昨年は前年日6%増の約4900件と再び増加に転じた。婚姻手続きを経ていない出産も相当数に上るとみられ、父親に養育を放棄された混血児の実態を示す正式な統計はない。婚外子の場合、大半は胎児の段階で父親の認知が受けられず、日本国籍が認められないうえ、母親が不法滞在などの発覚を恐れて出生届けをせず、無国籍状態になるケースもある。今年2月現在、支援組織のマリガヤハウスが受理した相談は計405件。うち189件は父親の所在不明や交渉拒否により打ち切られ、養育費の送金など解決に至ったケースは1割に満たない。〔参考資料「読売新聞」2000年6月5日〕

「変わる家族 (2)代理出産～義妹が生んだわが子」〔1997年3月7日・ETV、製作：ヨークシャー・テレビ/英 1994年・45分〕ジョンとクリスティンの夫婦は子どもを生みたいと希望しているが、妻は長年の不妊治療のあとで子宮を摘出され、ジョンの望みは絶たれた。見かねたジョンの兄は、自分の妻スーザンを「代理母」をしてもよいとジョンに持ちかける。ジョンは兄夫婦の申し出に乗り気な一方、クリスティンは反対していたが、積極的な兄の勧めにつき同意した。やがてスーザンのお腹にジョンの子どもが宿った。クリスティンは暫くのあいだ強い嫉妬心に苦しんだ。スーザンにはすでに2人の子どもがいるが、生まれてくる子は法律上は従兄弟の関係になる。スーザンは無事に男児を出産し、パトリックと命名された。病院内での親権の委譲に係わる書類上の手続きののち、ようやくクリスティンはパトリック

クを胸に抱いた。あとは治安判事裁判所で養子縁組の手続きが残るのみである。だが、パトリックの洗礼式が近づくにしたがって、2組の夫婦の心理に微妙な隙間が生じ始めた。

「変わる家族 (3)私の父はだれ～精子提供者を捜して」〔1997年3月8日・ETV・製作：キャパ／フランス2・1996年／仏・45分〕冒頭の場面—ごくありふれた親子に街を歩いている。母親に手を引かれた小さなアルチュールは知っている。今度生まれてくる妹か弟は試験管の中の小さなタネから生まれてくることを。この日母親のクリスティンは、精子バンクに精子を受け取りに来た。彼女の夫は男性不妊で、アルチュールは匿名の提供者の精子によって生まれた。フランスでは、アルチュールのような子が3万人いると言われている。提供された精子は試験管に入れて検査・分析され摂氏-196度の液体窒素の中で冷却保存されている。生まれてくる子どもには2人の父親が存在することになる。法律上の父親と生物学上の父親である。精子バンクの役割を果たしている「卵と精子の研究保存センター」では、厳密に守られているルールがある。それは提供者も提供をうける夫婦もお互いに相手を知らされないということである。人工受精で子どもをもうけるカップルが最も恐れているのは、いつか子どもが提供者の身元を突き止めて会いに行くかもしれないということである。クリスティンは、息子に対してお父さんは子どもをつくるタネを持っていないために、別のお父さんのタネをもらったことをはっきり教えている。クリスティンと夫のジャンは、息子に「出生の真実」を話したことを後悔していない。他方、50歳のビル・コードレイ氏は、母親が亡くなる時に「真実」を聞かされて以来、自分の「生物学上の父親」を必死で探し続け、そして突き止めた。

「この子はわが子?—DNAが迫る家族の選択」〔1997年10月28日・NHK『クローズアップ現代』・30分〕わが子が本当に自分の子なのか—そんな疑問にぶつかった時親子のつながりをそれを確かめる方法

が登場した。それを可能にしたのがDNA鑑定である。1997年春、日本に親子鑑定を専門に行う会社が現れた。相談件数はすでに1000件を越えている。検査サンプルはアメリカに送られ専門の研究所で詳しく調査される。だが真実を知った時、家族はそれをどう受け止めるのか、番組ではDNAによる親子鑑定を行わねばならない幾つかの事例を紹介する。親子鑑定の会社ができた理由には、現行の法制度では鑑定を必要とする係争を起こすことが前提で、かつ裁判所の許可がいるという条件がついていることも一因となっている。

『らせん階段』(‘The Spiral Staircase’ 1945年・米) 監督：ロバート・シオドマク、脚本：メル・ディネリ、原作：エセル・ライナ・ホワイト、出演：ドロシー・マクガイア。エリート教授が次々に身障者の女性を殺すホラーサスペンスだが、この教授は選ばれたエリートだけが社会に君臨でき、障害者には生きる権利はないという「優生思想」の持ち主だった。町はずれの不気味な古い館には、病床に付いた女主人と、何人かの怪しい人物たちが住んでいた。この屋敷に女中として、聾啞の娘が雇われるが、そのころ町では身体に障害のある娘ばかり狙った殺人事件が起こっていた……。優生思想は、しばしば社会的弱者の人権の抑圧に成り立つという実体性は、こうしたフィクションの物語をとおしていっそう明瞭に浮かび上がることもある。



以上、現代の医療技術の抱えるさまざまな問題に係わる番組を紹介して、そのいくつかの論点はかなり明確になったと考えられる。以下の映像資料は、総括的に鑑賞することにより、一人一人の問題意識と視点をより一層明確に形成する良質のたたき台となりうるはずである。さらに、医療の進歩の歴史的な概観、技術の進歩とその時代の価値観・倫理観と密接に連動してきた事実と、その価値観の個性・普遍性という揺らぎをも認識するためにも良質の番組である。

「生命誕生の現場～最新技術がもたらす重い課題～ (1)人間改良をめ

ざした男たち (2)生命の質～検査社会の到来 (3)人工臓器・胎児細胞利用の衝撃」[1998年2月2～4日・ETV・各45分]

「新しい生命観の時代 (3)「生命の選択」に直面する」[1998年9月30日・ETV・人間講座特別シリーズ、講師：森岡正博・30分]

「発見の世紀・第1部・医療の進歩 (1)病原と治療の追求 (2)心臓手術と臓器移植」[1999年1月22・29日・BS1]

「発見の世紀・第3部・地球と生命 遺伝と進化」[1999年2月13日・BS1・50分]

「発見の世紀・第4部・人間の探究〔後〕 遺伝と環境」[1999年2月19日・BS1・50分]

5 薬害事件と社会的差別

「優生手術～奪われた人生」[2000年11月20日『テレメンタリー2000』・NT21・30分] かつて、社会的差別を助長するような法律が存在した。「法律に手術されてしまいました」-番組の冒頭でA子さんが涙ながらに語る一言は、行われた手術が自らの意思によるものではないという意味において衝撃的である。彼女は子どもを生むことができない。その原因は、知的障害という理由で10代の頃に受けさせられた「優生手術」であった。「優生手術」とは、「優生保護法」に基づく不妊手術のことで、体や精神に遺伝性の病気を持つ人(法律では、精神病、精神薄弱などと明記されている)人を対象に行われた。これは本人の同意がなくても、医師が必要と認めた場合や保護者の同意があれば合法的な手術であった。日本の優生保護法は、1933年にドイツで施行された「遺伝病子孫予防法(断種法)」に倣って制定されたと言われている。ナチス・ドイツは健全な社会を構築するために、ユダヤ人の迫害のみならず、精神病患者や障害者は悪質な遺伝子を持って

いるとして、根絶する政策を進めた。優秀な子孫を増やすことで国家を繁栄させようとする「優生思想」がその背景にあった。筆者にとって不思議なのは、ナチス・ドイツの法律に倣ったと言われる「優生保護法」が、日本では戦後の1948年に制定されたということである。しかもこの法律の「不良な子孫の出生を防止する」という文言に筆者は戦慄を覚えるのである。なぜなら、最新の医療技術とされる遺伝子診断・遺伝子治療の目的と重なって見えるからである。

A子さんは、養護学校を出たあと不動産屋に住み込みで働き出したときに知能検査を受けた。そして知能指数が低いという理由で、この手術の対象者となった。本人の同意のない不妊手術の数はこれまで1万6千520件にのぼるといふ。この「優生保護法」は、それによってどれだけ多くの人々が人権を踏みにじられてきたかについての十分な反省が行われないうちに、1996年「母体保護法」に改められ、強制的な不妊手術について規定した条文は削除されたが、新法も課題を抱えている。

「不安の時代を越えて (6)先端医療と生命倫理」〔1996年12月24日・ETV・45分〕この番組の前半は、人間のすべての遺伝情報を明らかにしようとするヒトゲノム計画について展望し、合わせて遺伝子と人間の行動や個性との関連の有無について議論される。さらにこの年に「優生保護法」が「母体保護法」に改められたことに関連して歴史的背景が詳しく紹介される。以下では「優生保護法」成立の経緯を簡単に紹介する。

昭和20年代初頭、日本列島は戦地からの復員、満州など旧植民地からの引き揚げなどで人間があふれていた。終戦後、出産ブームが起これ、人口は5年間で1千万人増加した。国家的非常事態と言われる「人口爆発」だった。この頃、中絶は刑法の「墮胎罪」によって禁じられていた。しかし、食料不足の中で闇の墮胎や子捨てがひんぱんに起これ、大きな社会問題となっていた。国会では、中絶や避妊の合法化を

求める声が相次いで起こった。1947年、社会党の加藤シヅエら3人の議員が母性の保護すなわち女性の体や健康を守るためであれば、中絶や避妊が許されるとする法案を提出した。翌年、民主党の谷口弥三郎議員を中心に、与野党の共同提案で改めて法案が提出された。谷口はすでに国土は飽和状態であり、中絶を合法化し、国をあげての人口抑制策に取り組みねばならないと主張。また、産婦人科医であった谷口は、遺伝病の人の出生(しゅっしょう)を抑圧することが、国民の素質の低下を防ぐとして、優生思想の必要性を展開した。この共同提案は全会一致で国会を通過した。こうして1948年、優生思想と母性保護という2つの性格を持った「優生保護法」が誕生した。刑法の墮胎罪はその後も残ったが、「優生保護法」の定める条件に合えば、中絶をしても罰せられることはなくなり、中絶の合法化に事実上道を開いた。このように「優生保護法」は、国の人口政策と深くかかわっていた。特に中絶を認めて子供の数を減らすことは、戦後復興の為の緊急措置と位置づけられた。1949年、「優生保護法」に中絶の範囲を一気に拡大させる新たな一文が盛り込まれる。それは「身体的または経済的理由により」という言葉だった。経済的、すなわち貧しさ中絶の理由となることは、当時生活に追われていた多くの女性が中絶できるようになった。また、この言葉によって医師も墮胎罪に問われる恐れがなくなった。この「経済的理由」が加えられたことにより、中絶は急増し、同時に出生数は劇的に減少していく。1957年に生まれた子供の数157万人に対し、中絶の数は112万人にも上った。しかも、これは都道府県に報告された数であり、現実には300万人の胎児が中絶されただろうと言われている。これは太平洋戦争中の死者の数にほぼ等しい。したがって、広い意味で戦争による犠牲者は600万人であると筆者は考えたい。こうして日本は、世界に類を見ない「墮胎天国」と言われるようになった。今から40年ほど前のことである。

番組の中で、当時の厚生省公衆保健局長であった牛丸義留氏は、

インタビューで次のように述べている。「経済成長率が上がっていく一方で、人口増加率が減少していったから、戦後の日本は豊かな生活ができるようになった」と明言している。これは300万人の胎児の「間引き」によって、一人あたりの分け前がそれだけ大きくなったと言っているのに等しい。つまり「優生思想」とは、一国の国民の生活向上の為に、どこかで誰かが犠牲を払うという思想であることがはっきりしている。もちろん、牛丸氏の経済成長論には、中絶に伴ったであろう延べ300万人の女性の心身の傷は考慮されていない。

次に紹介する「薬害エイズ」の問題に関しては、露骨に厚生省の犯罪と言えるのか言えないのかとかく当事者責任がうやむやにされがちな日本社会でこうした問題を論じるのは、まさに命がけである。筆者はまだ原因不明の事故死で一生を終えたくないのので個人的態度は明確にしないでおくことにする。

「海を渡った汚染血液～1万5千頁が語る薬害エイズ」〔1997年1月19日・NHK・60分〕番組の冒頭は、製薬工場の生産現場の風景から始まる。次々と容器の中から流れ出てくる黄色い固まり。これは人間の血液の一部であり、凍結されて「血しょう」と呼ばれる成分が加工されていく過程が映し出される。血しょうは白い粉末に姿を変え、人の命を支える薬に生まれ変わる。血友病の治療薬となる「血液製剤」である。エイズ薬害訴訟の5社が製造したこの「非加熱血液製剤」にはすべてアメリカから輸入された血液が使われている。日本の血友病患者5000人のうち1800人がこれらの薬でエイズ・ウィルスに感染し、400人を越える人がすでに亡くなっている。薬害エイズ事件で歴代3人の社長が起訴された「ミドリ十字」が販売した血液製剤は、国内シェアのおよそ半分を占めていた。ミドリ十字は原料となる血液をアメリカに作った子会社から輸入していた。この会社は全米各地から「売血」された血液を買い集める拠点して作られたアルファ社であった。NHKは、アルファ社の内部文書を独自に入手した。この文書は厚生

省がエイズ対策を検討していた1983年から1985年までの時期に書かれたもので、エイズの危険性の高い血液を密かに集めたこと、そしてエイズ・ウイルスに汚染されたことを知りながら日本に送りつづけたことを如実に示す記録である。悲惨な薬害がどのようにしてアメリカから日本にもたらされたのか、1万5000頁の文書から数々の新しい事実が明らかになる。番組は、文書の中に散見される ANGOLA という暗号めいた言葉の意味を探ることから始まる。これはルイジアナ州立アングラ刑務所のことを指していた。服役者の大半は、麻薬の常習者・同性愛者であった。エイズ・ウイルスの危険性の高い集団から血液をどうして買ったのか。それは刑務所内では血液を市価の半額で買うことができたからである。ミドリ十字は血液製剤の需要が将来は伸びるだろうと早くから予測していた。そうすれば会社の利益は膨大なものになるはずであった。1980年代前半、日本は世界一の血液消費国であった。世界で集められる「血しょう」の3分の1を一国で使っていた時期でもある。番組は、アメリカ各地で丹念な取材を積み重ね、次第にエイズ・ウイルスに汚染された血液製剤であることを知りながら売りつづけるという「製薬会社の犯罪性」を次第にあぶり出していくことに成功している。検証報道番組として質の高いものである。現在審理が継続されている「ミドリ十字」裁判の深層に潜む問題として以下に紹介する文献も大変興味深いものがある。

「ミドリ十字と731部隊～薬害エイズはなぜ起きたのか」松下一成著、三一書房 1996年。この本でとくに興味を引くのは、太平洋戦争中、東京の陸軍防疫研究室が激しい空襲を避けて研究施設の一部を新潟市に疎開させた経緯を紹介するくだりである。その新潟出張所は、旧新潟競馬場（関屋）に置かれた。そこには農耕馬、軍馬が多数いて、また細菌培養に必要な動物飼育の条件が揃っていて研究をするのに恰好の場所であったという。戦争末期には、証拠隠滅のためにペスト菌などを利用した細菌兵器は新潟市・関屋浜沖に海洋投棄され現在もそこ

に眠り続けているらしい。731部隊の戦争犯罪性を暴くことは本稿の目的ではないが、医学者の戦争犯罪と、製薬会社の社会的犯罪性には、時間の隔たりこそあれ、地下茎のような連続性を想起する時に背筋に寒いものが走るの筆者一人だけではないはずである。一方は戦争に勝利するという大義名分のために人体実験をした人達であり、他方は企業の業績向上という大儀名分のために危険な血液をもとに薬を作りつづけた人達であるという意味において。

「薬害エイズ16年目の真実～川田龍平・郡司元課長に聞く」〔1999年7月4日・NHK・50分〕「官職は神のもの、官吏は悪魔のもの」はドイツの諺である。これは官僚主義国家において、実際の行政を主導する官僚のさじ加減で政治が動かされているということのなぞらえである。厚生省は、難病「下垂体性小人症」治療費の患者支払分を、全額公費不安から、男性は156.4センチ、女性135.4センチの身長を上限として打ち切った。この上限がどういう医学的根拠を持つのか不明のまま、患者は月額約6万5千円の自己負担を突然強いられた。同省は老人保険法が義務づける「がん検診」の公費負担も打ち切った。大蔵省の言い分は「政府の一般会計の削減策」。年配者の医療負担も、阪神大震災被災者への公的支援の欠落も発想は弱者の切り捨てであろう。だが政治家への企業献金禁止も金融・財政分離問題も先送りとして、政・官のもたれ合い、彼らはたとえ一部の国民が犠牲となっても自分たちの利益にはしっかり固執するのである。7万余りの心身障害者を「生存の価値なき生命」として抹殺する「人種遺伝学」は、一方で弱者の排除をそして一方では「生命の泉」(『金髪のヨハネス』参照)計画のようなエリート選択思想と同時進行したのである。政・官あげての弱者を切り捨てて省みない今の日本も同じではないか。阪神被災者の「孤独死」などはその犠牲の象徴とは言えないだろうか。川田龍平さんの怒りは、理不尽な病気へ感染した怒りを通り越して、そうした日本の国のシステムの非人間性に向けられているのである。

⇒参考資料：放送塔〔『読売新聞』1999年7月13日「無責任すぎる返答に怒り」〕NHKスペシャル4日「薬害エイズ16年目の真実～川田龍平が郡司厚生省元課長に聞く」は惨憺たる内容だった。当時の状況や責任の所在を問う川田氏に対し、責任逃れとしか受け取りようのない返答を繰り返す郡司元課長。厚生省内部の構造的な欠陥など、個人レベルでは解決し得ない問題が含まれていることを考慮した上でもなお、余りに第三者的な発言に怒りを感じざるを得なかった。対峙する相手の手ごたえのなさに、絶望するしかないといった表情の川田氏が痛々しかった。(44歳・女性)(同様9通「この種の事件が再発しないように徹底追求を」「(郡司元課長に)今からでも良心と向き合って、真実を語ってほしい」など4通、「問題は残ったが、意義のある対話だったと信じたい」など3通)

⇒参考資料：はがき通信〔『朝日新聞』1999年7月19日「理性的な二人」〕「薬害エイズ16年目の真実」を見た。被害者川田龍平君の呼びかけに応じた郡司元厚生省課長の勇気と、二人が理性的に真実に迫ったことをたたえたい。厚生行政の矛盾を突き、責任を追及する川田君に対し、エイズの実態が分からなかった時点での行政対応を郡司氏が語った。複雑な社会システム、医療行政、医学界、病人のありようが、言葉の裏に透けて見えた。(62歳・男性)生死見えない行政—川田氏の命をかけた言葉に対する郡司元課長の歯切れの悪い答え。行政の仕事は、人の生死も見えなくなってしまうのだろうか。「また同じことが起こるかもしれない」という郡司氏の言葉に怒りを越えて脱力感に襲われた。(37歳・女性)

「フィラデルフィア」(‘Philadelphia’ 1993年)製作/監督：ジョナサン・デミ、脚本：ロン・ナイスワーナー、出演：トム・ハンクス、デンゼル・ワシントン、ジョアン・ウッドワード。「羊たちの沈黙」でアカデミー監督賞に輝いたJ・デミが「エイズ」を真っ正面から描いて注目を集めたドラマ。フィラデルフィアのエリート弁護士アンド

リユーは、ある日エイズを宣告される。それに気づいた会社側は彼を即刻解雇する。アンドリユーはエイズ患者への不当な社会的差別として訴訟を起こすことを決意する。しかしながら彼の弁護を引き受けようという者はいない。彼はやむをえずかつての敵であった黒人弁護士ミラーのもとを訪れる。アンドリユーの熱意に打たれたミラーは、奇妙な友情を感じながら、法廷に立つことになる。ブルース・スプリングスティーンの美しい主題歌も映画のストーリー同様に深い感動を呼ぶ。(125分)

「忘れられたエイズ～世界からの緊急レポート」[2000年12月18日・NNNドキュメント2000・TeNY・55分] 番組のタイトルが示すように、次々と生起する社会的事件の連鎖の中で、話題の中心から遠のいた感のあるエイズ問題にNNNドキュメントは1時間枠で取り組んでいる。一人の青年が岡山大学医学部の大学祭で講演を行うことになった。彼は小学生の頃にHIV(エイズ・ウイルス)に感染した。血友病を治療するめの血液製剤が汚染されていたためである。名前は桜屋伝衛門(26歳)。自らつけた仮の名前である。HIV感染者の実情を多くの人に知ってもらおうと、始めてテレビに出演する決意をした。番組では大学生との交流や討論の様子が紹介される。番組のクルーはアメリカにも飛ぶ。全米43万人と言われるエイズ・ウイルス感染者をいちばん多く抱えるニューヨークでは、出産を間近にひかえたデボラ・パターンソンさん(44歳)の不安な心の内を丹念に取材する。さらにアフリカの深刻な現状も報告される。番組の中で、デボラさんや桜屋さんが毎日服用し続けている発症を抑えるための薬びんと錠剤の色・大きさなどに関してはすべてボカシが加えられている。それはHIVの発症を抑える薬であることが不特定の視聴者が知ることによる不当な差別の助長を防ぐための配慮であり、同時に桜屋さん以外にHIV感染を公にしたくない大勢の人のプライバシーを考慮したものである。大学祭のティーチ・インである医学生が次のように質問する。「エイ

ズであることを知らせない方が、治療のできないままたとえ命が短く
なっても、社会的差別を受けるよりはその人にとって幸せだと主張す
る医者があるが、どう思いますか」。医療関係者がこうした隠蔽を公
然と主張する一方、日本ではエイズ・ウィルス感染者の女性の多くが
誰にも悩みを打ち明けられず、沈黙を強いられている。性感染に対す
る日本社会の偏見の壁が厚いためである。番組では匿名を条件に一人
の女性とのインタビュー取材が紹介される。彼女の唯一の心の支えは、
同じように感染した女性同士との対話である。当然ながら彼女たちの
関心は「妊娠と出産」である。現在、医療の現場ではすでに HIV 感
染者の出産は可能となっている。番組は、無事に元気な女の子を出産
する場面で終わる。赤ちゃんが感染しているかどうかの結果が出るの
は最新の医療技術でもってしても1年半後のこととなる。

「感染の不安・薬害エイズ家西夫婦の出産」[2000年7月30日・『報
道特集』BSN・25分] 1995年薬害エイズ原告訴訟団の一人として家
西さんは実名を公表した。企業側と和解が成立した後で、家西さんは
薬害エイズの問題を風化させないために、支援者の力で国会議員とな
った。これまではエイズ・ウィルスに感染している人にとって、子ど
もを生むことは避けるべきだと言われ、また本人たちも諦めていた。
こんな中で家西夫婦は自然妊娠の形で子どもを生む決意をした。はた
して妻の知加子さんや子どもには HIV は感染しないのか、不安はつ
きまとうが、検査の結果は「陰性」であった。これまでの調査結果で
は性行為による HIV 感染率は1%である。とはいえ家西議員は他の
HIV 感染者に積極的に子どもを生むことは勧めていない。一方、社
会が二次感染の危険性を根拠に、HIV 感染者に子どもを生むべきで
はないと、かつてハンセン病患者の人権を踏みにじったように声高に
叫ぶことはできない。陣痛開始から29時間—難産の末ようやく知加子
さんは3300グラムの女の子を無事に出産した。社会の差別や偏見に負
けないでほしい—今、家西夫婦は子どもの成長を願っている。

「私たちからの招待状」〔2000年10月15日・NHK『にんげんドキュメント』45分〕2000年8月10日、1組のカップルの結婚式がとり行われた。新郎は薬害エイズの被害者である慎二さん。新婦は、慎二さんの病気を理解した上でともに生きる決意をした真理子さん。2人が交際を始めてから5年。現在はいっしょに服飾雑貨店を経営している。これまで見守ってくれた人たちに結婚式で幸せな姿を見てもらいたい。そんな思いを伝えようと、招待状に手作りのメッセージカードを添えた。だが、2人に結婚にはいくつかの問題が残されている。慎二さんの病気を理由に真理子さんの母親が結婚に反対していることと、慎二さんの病状がいつ悪化するかわからないということである。エイズに対する正しい理解がまだ一般に浸透しているとはいえない中で、2人はこれからどのように生きていこうとしているのか。慎二さんと真理子さんの結婚式までを追う。この番組に対しては、以下に紹介する視聴者の感想が平均的であろう。「薬害エイズ被害者の男性と健康な女性が結婚式を挙げるまでのドキュメント。病に侵されていても、女性を幸せにしなければと薬の副作用にも負けず頑張る男性。病気を理解して心寄せる女性。エイズに対する啓もう活動にも力を注ぐ二人。心打たれた。女性の母親から最後まで結婚を賛成もらえなかったけど、立派な式だった。力を合わせ、これからも幸せに生きていくことがはっきり分かりました。(女性 52歳、出典：『新潟日報』2000年10月18日「集音マイク」)



筆者の記憶で最も古い「薬害」に関する記憶は、「森永ヒ素ミルク事件」と「サリドマイド障害児」である。ヒ素ミルク事件については、弁護士中坊公平氏の弁護活動との関連でつねに言及されているのでここでは取り上げず、参考文献／映像資料のみを紹介するにとどめ、サリドマイド薬害について言及することにする。

(注3) サリドマイド奇形児は、母親が服用した結果生まれてきた。

両腕のつけ根から腕が欠落してすぐ手にいたる形から、一時は『アザラシ奇形児』とも呼ばれ、マスメディアもその言葉を頻繁に用いた。現在はもちろんそのような動物にたとえることによる差別を助長するような表現は使われていない。

「典子は、今」(1981年・日本) 監督/脚本:松山善三・出:辻典子。26倍という難関を突破して、熊本市役所に就職。サリドマイド児として両手がないうまに生まれながら、訓練によって足を手と同じくらい使えるようにし障害を克服した辻典子の生き方を劇映画化した作品。(118分)

「未来のない子と言われて～自立するサリドマイド児たち～」[1996年12月6日・ETV・45分] ドイツの製薬会社が開発した鎮静・催眠薬のサリドマイド剤。1960年代前後に妊娠中に服用した世界中の女性たちが、手足に障害をもつ子どもを産んだ。当時、薬の副作用を警告する医師はかなりいたが、製薬会社は危険性を否定し続けた。その結果、世界全体では1万人以上のサリドマイド児が生まれた。スウェーデンでも100人を越えた。医師から子どもの将来を諦めるように言われた親もいた。しかし、30年以上たった今、自立して社会生活を営んでいる人も多い。この国の男女7人のサリドマイド児たちの決して平坦ではなかった人生の歩みを追うドキュメンタリー番組である。

「サリドマイド児として生きて」[2000年12月1日・ETV・45分、製作:KA プロダクションズ/カナダ・1999年] かつてのサリドマイド児たちは、誕生当時ほとんど生存できないだろう、生き延びたとしても一生施設の中で暮らすだろうと言われていた。サリドマイドの安全性が疑問視されはじめたときには、すでに世界で1万2000人、カナダでも120人の子どもが薬禍の犠牲となっていた。しかし、1970-80年代、彼らは生存を懸けた戦いに見事に打ち勝って青春を謳歌していた。もちろん社会の奇異の目にさらされなかったわけではないが、彼らは今自らを「サリドマイダー」と呼び積極的に社会参加をしている。19

63年、カナダ政府は薬害の犠牲者への援助を実行すると約束したが、それは未だに完全に実現されてはおらず、販売許可を与えたことへの責任を認めずまた謝罪もしていない。政府が支払った一時金も長くは持たず、将来への不安も隠せない。アメリカでサリドマイドの再使用の動きが出たときには公聴会にもかけて、薬害被害者の実情も訴えるなど、いつもたくましく生きていこうとする姿勢はとても前向きである。

「サリドマイド～全米使用認可の背景を追う」〔1999年6月25日・NHK、制作：BBC／英・1998年・45分〕1950年代半ばに西ドイツで開発された鎮静・睡眠薬、サリドマイド。世界中で1万人以上の障害児を誕生させ、60年代初めから発売中止となったこの薬が、1998年米国で認可され、再び脚光を浴びはじめている。最近になって、サリドマイドの薬効は結核やエイズ、ガンなどの難病にも有効であることが確認されつつあるが、副作用の危険性はいまだ解消されたわけではない。かつての忌まわしい記憶とともに、サリドマイドの研究最前線を取材し、その背景と使用に関する問題点などを取り上げる番組。



かつて肢体不自由者は、家の中にじっと閉じこもり社会に出ることはなかったと言われる。その理由は、今のように生き方の多様性という言葉が社会全体に少し広がりつつある時代と違って、社会的な少数者、外面的に肢体の一部が不自由であると分かることによる「有標化」された存在として目立つことによる社会の好奇の視線・蔑視・差別の対象になることへの恐怖から家の中に閉じこもったのである。また肢体が普通でない子どもを産んだ母親はたいいていの場合自らを責めつづける。少なくとも自分を責めつづけるに十分な理由を見いだしている。そしてわが子への愛情と、世間体という外面とのほざまで分裂をきたす。先天的な肢体不自由者、被爆者、水俣病患者、サリドマイド、エイズ患者そしてハンセン病患者などー社会的少数者はまさしく少数者

であるがゆえに、絶対的多数者の中ではともすれば周辺に押しやられ、法的保護の対象ともならず、そして社会的に差別されてきた。そこにあるのは、異質なものは排除したい、社会は同質でありたいという生物的願望であり、同質の中に帰属することの安心感である。多様性よりも統一性・集団性を志向してきた日本社会の中であって、彼ら少数者はこれまで大変生きづらかったにちがいないことは想像に余りある。しかし、今は違う。大勢の人間が社会の中に巧妙に仕掛けられた差別構造、それを支える「隔離の思想／排除の思想」ととくに気づいているからである。隔離／排除の延長線上にあるものは何か。それは選良／エリート／少数特権者になるという垂直上昇志向である。子どもは学校というシステムに放り込まれると、できれば自らも少数エリートの階層に食い込もうとする競争原理の実行を望むと望まざると強いられる。日本の教育制度はそうした競争原理という名のある種の優生思想を密かに児童・生徒にけしかけてきたとも言える。



「感染症の時代 (1)求められる新たな情報システム (2)隔離の思想を越えて」〔1998年2月16・17日・ETV・各45分〕(1)1996年堺市で発生したO157事件を事例として、緊急事態に対する「医療・行政の情報システムの欠陥」を検証する良質の番組である。とりわけ追田朋子・NHK解説委員のゲストの専門家から意見を引き出す上品な対話技術が冴える。

(2)明治30年に制定された「伝染病予防法」はコレラ・赤痢・チフスなどの集団発生により社会的にパニックになりそうな疫病への対策を目的としたものであるが、同時にらい病患者をも強制的に隔離するというものであった。「隔離」は「強制収容」と同義である。今日的視点で見ると、人権への配慮の欠落した「社会防衛意識」にもとづく悪法でありながら100年も存続した稀に見る長寿な法律の一つである。100年存続したということと言い換えると、その後の科学の進歩や治

療法の発達をも無視してきたということの意味する。古い法律で縛られた人々がどんなに悲惨な人生を強いられるかという事例が1万人のらい病患者たちである。法律の硬直性がとりもなおさず社会の硬直性・退歩性に連動する具体例として一見の価値ある番組である。「エイズ予防法」の問題点も深刻である。

「52年目の社会復帰～あるハンセン病作家の旅立ち～」〔2000年5月31日・MBC「鹿児島放送」<TBS系列>・50分〕作家・島比呂志さん(81歳)は、かつてのハンセン病の元患者である。病気の後遺症のため視力は落ち、指は曲がったままである。現在島さんは、長く住んでいる星塚敬愛園(鹿児島県鹿屋市)・国立ハンセン病療養所の一室で旺盛な執筆活動を続けている。島さんは患者を強制隔離してきた国の責任、そして今なお日本社会に残る偏見と差別の悲しみを書きつけてきた。療養所の納骨堂には、今なお引き取り手のない1800柱の骨壺が収納されている。一度療養所に入った人間は、二度と生きて社会に出ることのできなかった事実を、こうした骨壺は無言のうちに語っている。昨年6月、島さんは療養所を後にして、困難をきわめるであろう社会復帰の一步を踏み出した。島さん夫婦の社会復帰の全面的な支援を申し出た北九州市在住の中谷昭子さんの熱い善意に支えられてのことである。「らい予防法」が廃止されたのは、奇しくも「優生保護法」の廃止と同じ1996年のことである。

「九州沖縄一本勝負～あたりまえの日々へ～元ハンセン病患者の社会復帰～」〔2000年10月27日・NHK福岡・25分〕北九州市の市営住宅に住みはじめた島比呂志さん夫婦の社会復帰後の暮らしぶりを丹念にルポルタージュしたローカル番組。

「人間回復への挑戦～『収容所』から社会～」〔2000年10月9日・NTV 21「テレメンタリー2000」・25分〕昭和28年(1948年)に施行された「らい予防法」は、ハンセン病患者の絶滅のための「終生隔離」を合法化したものであり、療養所は一種の「収容所」であった。所長には

懲罰権が与えられていた。療養所は、人の住まない山奥(栗生楽泉園・群馬)や島(長島愛生園・岡山)などにつくられた。社会からの隔離の徹底と逃亡を阻止するためである。所持金は所内通用券に換えさせた。これも社会への逃亡を防ぐ巧妙な手段である。入園者はかつて「座敷豚(ごしきぶた)」と呼ばれ、さげすまれ差別されてきた。番組では、療養所に暮らす森元美代治さん(62歳)と美代子さん(54歳)の夫婦を取材し二人の人間回復へのひたむきな生き方を紹介する。二人は実名で講演旅行し、かつてのハンセン病患者への差別と国の謝罪を求めて今も闘っている。

ハンセン病は、日本ではすでに絶滅している。しかし今も全国13カ所の国立療養所では、およそ4500人の人が「社会に帰れずに」暮らしている。4年前の「らい予防法」の廃止以降、故郷に帰った人の数は森元さんを含めてわずか3人だけである。平均年齢74歳の高齢者たちは、今更肉親たちと和解する術を持たない。その意味において「らい予防法」は死んではない。この法律が戦後の日本社会の隠れた差別を象徴する過去の負の遺産となるのは、すべての療養所生活者が、筆者の中途半端な共感とは無関係に、つつがなくその生を終えた時なのであろうか。それでも過去の事実は語り継いでいかなければならない。

「伊丹十三が見た医療廃棄物の闇」[1998年3月31日・NHK・50分]
1997年暮れにビルから投身自殺した映画監督・伊丹十三の最後の仕事となったNHKドキュメンタリー。医療廃棄物の行方がテーマ。映画「大病人」を作った伊丹監督の仕事の延長線上ともいえる番組になっている。リポーターとして登場する伊丹は番組の冒頭、ある病院で「あなたが入院をして、治療を受け、めでたく退院したとする。それは大変結構なことですが、あなたの入院をゴミという見地から見直してみると、ここにはいろいろな問題が隠されていることがわかってくる…」と語りかける。1996年夏、産業廃棄物処分場に血まみれの注射器や点滴チューブ、胎盤などの廃棄物数十トンが埋もれているのが発見

された。病院が出す廃棄物の多くは、二次感染などの危険性もある。大がかりな撤去作業が続く現場で伊丹の取材が始まる。不法投棄事件からは、死産した4ヵ月の胎児の不法焼却も明らかになる。だが、なぜ捨てたのか。調べるうちに「闇のシステム」が浮上する。暴力団ルートのあるところも指摘される。深い「闇」に向けて伊丹は精力的な取材を重ねていく。そして暮れも押し迫る12月、自ら命を絶つ5日前までロケをしていたという。番組の最後の言葉は「廃棄物は、われわれ自身の問題です。嫌ったり避けたりするだけでは何ごともしません」。妻である俳優・宮本信子も放送を強く望んだという。



ハンセン病を話題にしている今、唐突に医療廃棄物の問題を組み込んでしまったが、問題の根は一つであることを強調したいがためである。すなわち、かつての「優生保護法」の成立要因も含めて、社会的なコスト・パフォーマンスが底流にあるということ、言い換えると「医の倫理」は絶えず「経済の論理」に影響されるという単純な事実である。かつて、ドイツの医学者がナチスに迎合した理由はきわめて理解しやすいものであった。それは、恵まれた研究環境と70%増しの給料であった。そして、元ハンセン病作家・島比呂志氏が全魂を込めて告発するのは、国家が法律の名において行った非人道的行為ばかりではない。彼の執念は、社会の中の差別に無関心であったり、あるいは見て見ぬふりをしている我々の生きる態度まで穿(うが)つのである。ハンセン病に関する問題のしめくくりとして、一本の日本映画を取り上げる。

「砂の器」[1974年・松竹／橋本プロ] 監督：野村芳太郎、撮影：川又昂、原作：松本清張、出演：丹波哲郎、森田健作、加藤剛、加藤嘉、緒形拳、島田陽子。国鉄蒲田駅の操車場で身元不明の男の死体が発見された。捜査を担当した警視庁のベテラン刑事・今西(丹波)と若手の吉村刑事(森田)は必死の聞き込みを続けるが有力な手がかりが見

つからない。やがて被害者が事件当夜にバーで話していた地域の名称と、中央線の車窓から若い女性が散らしていた布切れに付着していた血液反応から被害者像が絞られてくる。被害者はかつて島根県で警官だった三木謙一(緒形)で、彼と車窓の女・高木理恵(島田)はそれぞれ音楽家の和賀英良(加藤剛)とつながっていた。和賀は幼少の頃、らい病にかかった父親と石もて追われるように故郷を捨てた辛い過去があり、また彼は有名人となった現在、父の病気が社会に広く知られることを極端に恐れていたため、三木の殺害に及ぶ。

一つの法律がどれだけの被害を生んできたのか。慄然とさせられるのが1953年に制定された「らい予防法」である。熊本、鹿児島の手ハンセン病国立療養所の入所者13人が1998年3月末、司法の制定とそれに基づく患者の強制隔離について国家賠償を求める訴訟を熊本地裁に起こした。さらに弁護士は、新たな提訴希望者に対する聞き取り調査を実施し、1999年9月29日第2次提訴を行うとしている。ハンセン病は、長く不治の病とされていたが、やがて有効な薬が次々に発見され、完治する病気になっていた。菌の感染力は弱く、治療薬を飲みはじめると感染させる恐れはなくなる。このため欧米では早くから強制隔離を在宅治療に切り換えてきた。だが、米軍占領下にあった沖縄を除く日本各地では戦後も強制隔離が続けられてきた。強制隔離は入所者の人生を大きく狂わせ、ハンセン病について誤ったイメージを社会に植えつける原因ともなった。この点においては、マスメディアの報道姿勢についても検証されねばならないだろう。強制隔離においては、子どもを生まないように強制的な不妊(断種)手術が行われていたことも看過できない。1996年4月、司法は関係する学会の自己批判声明などを受けてようやく廃止されたが、なぜ同法は制定され存続してきたのか。同法が廃止に向かいつつあった1995年12月、過ちを再び繰り返さぬようにハンセン病の治療と法制化の歴史を検証する必要があるが、国の責任と歴史の検証は、これから十分時間をかけてなされていかな

ければならないことである。

6 内なる優生思想と生命倫理 ～メディカル・リテラシーの構築へ

1997年9月、日本の各新聞はいっせいに衝撃的なニュースを伝えた。それは、一般的には「高福祉国家」とみなされているスウェーデンでのことである。新聞等の資料によれば概略は以下のとおりである。

スウェーデンの歴代の政権は、より優秀なスウェーデン人を作り出すためとして、1935年から1976年のおよそ40年間にわたり、ひそかに6万人の男女に強制的な不妊手術を行っていたことが明らかになり、国民に衝撃を与えた。1935年は、ナチスがドイツ人とユダヤ人との結婚を禁じた「血統保護法」を成立させた年でもあった。強制的な不妊手術の根拠となった「断種法」は、「劣った人」や「多産の独身女性」「異常者」「ロマニ（かつてジプシーと呼ばれた人々）」などを社会から一掃する目的で、不妊手術を受けさせるべきかどうかの決定権を医師または裁判所に与えていた。強制不妊の主要な動機の一つは「国民がより健康になれば、社会保障の必要な人がそれだけ少なくなる」という経済上の理由だったという。この経済的理由は、そして「スウェーデン人」を「アーリア人」と入れ換えれば、何の無理もなくナチスが行った優生政策と全く一致することになる。スウェーデンの政治を1930年代から支配してきた社会民主労働党は、同国を世界的に有名な福祉国家にしたが、その背後では国会が全会一致で承認した強制不妊というむごい慣行があったことになる。北欧諸国は、ナチスが最優秀と喧伝したアーリア＝ゲルマン人の故郷とも考えられ、第2次世界大戦中にドイツに占領されたり、消極的な衛星国になったことなどから、ナチスの人種政策の影響をかなり強く受けたと見るのが妥当であろう。

断種政策の源流とされる「優生学 (eugenics)」は、1883年にダーウインの従兄弟にあたる英国の科学者フランシス・ゴルトンが提唱した。ナチスで政権をとるちょうど50年前にあたる。彼はダーウインの進化論を適用し「優れた人間」を増やす社会改革の実現を基本理念としており、英米社会の一部に徐々に受け入れられていった。これは一種の「生命の価値判断」思想でもあった。彼が考えたのは、優秀な人間から優秀な子孫が生まれ、劣等な人間からは劣等な人間が生まれるというものである。もしそうであれば、より良い社会を作るためには、優秀な人間が子供を作り、劣等な人間には子供を作るのを遠慮してもらうしかない。そうしないと、イギリスの国力を優秀なまま維持することができなくなるということである。この考え方は、当時のイギリスの知識人の間でかなり流布し、良く知られた文化人も数多く賛同したという。人間が子孫を残すという、地球上の生物としてごく自然の行為を、国家権力の管理下に置くという思想は「優生学」を出発点とし、ナチズムはそれをいっそう洗練したものに仕上げ(もちろん非難と皮肉をこめて言うのであるが)、そして徹底した実践に移していった。

「優生学」は、さらに次のように考えを押し進めていく。劣等な人間は、子供をたくさん産む。文明が進歩するにつれて、彼らが産んだ劣等な子供たちが死なずに生き残るようになった。そんな傾向が進んだ結果、イギリスの人口に占める劣等者の割合はどんどん増加している。だから、劣等な人間には子供を作らないように勧めたり、あるいは子供が生まれにくいような手術を勧める必要がある。では、一体どういう人が劣等なのか。具体的には、精神障害者、知的障害者、アルコール依存症者、犯罪常習者などであり、言い換えれば「社会のお荷物」とみなされている人々のことである。優生学者や知識人はこう結論する—「彼らは生きるに値しない人間である」—と。

20世紀に入り、都市化の進展や移民の増大などが知識層の不安をあ

おりつつも「優生学」はアメリカに渡ってさらに展開していく。犯罪者などの「劣等な家系」が本当に子孫への代々遺伝していくのかどうかという、大々的な調査が真面目に行われた。その結果の一部は、後に公開されたが、それによると、犯罪の傾向は子孫へと遺伝していくとされている。もっとも現在では、その調査には「捏造(ねつぞう)」すなわちデータの改ざんが行われたことも判明している。科学におけるデータの捏造には、我々はいかに無防備であるかということは、最近発覚した「石器の埋め戻し事件」でも明らかなことである。無責任きわまりないのであるが、穴があったら入りたいのは、考古学者を自負してきた本人自身なのだろう。猛省を促したい。さて、そのような一見した科学的なデータは正しいものとして受け止められていったアメリカでは、「劣等な」人間に子供を産ませないようにする法律が各州で制定されていくのであるが、この段階で「劣等な」人間に、強制的な不妊手術を行う「断種法 (sterilization)」も登場した。1907年のインディアナ州を手始めとして20州以上で断種法が制定され、41年までに知的障害者、性犯罪者など約3万6千が不妊手術を強制された。法制定の動きは欧州でも活発化した。それら断種法の大半は、対象の選別基準があいまいな上、人権保護の規定も欠いていた。だが、世界的に見ると断種手術を避妊の手段として最大限に活用したのはやはりアメリカである。とくに1970年代には、政府が避妊目的で補助金をつけたため、70年内前半だけで230万人の女性が不妊手術を受けている。知的障害者の断種の同意問題は、自己決定の原理に立脚する生命倫理にとってはすでに重要な問題となりつつあった。

ナチスドイツは1933年に、断種法を制定して以来、最初の3年間で約22万人を断種した。ナチスは、金髪で青い目のアーリア=ゲルマン人を一人でも多く増やすために、全国民の個人生活、健康そして出生を管理しようとした。ヒトラーはこれを「人間の国有化」と称している。そして推定で37万5千人が断種されたが、これは当時のドイツの

人口の0.5%が手術を受けた計算になる。ナチスは、アメリカの経験から多くを学び、それを障害者の大量「安楽死」に結び付けていった。ナチスのファシズム的犯罪の最大の批判点は、言うまでもなくユダヤ人に対する人種絶滅(ホロコースト)政策であるが、その影で優生政策は大きな非難の対象にはならなかった。事実、アメリカ映画「ニュールンベルグ裁判(1961年)」が公開された時に、大抵の人はユダヤ人のホロコーストが厳しく糾弾されるものと暗黙の内に期待した。しかし、この映画の主題は、優生政策の被害者とそれに対する法務大臣の戦争責任であった。米本昌平氏は次のように述べている。「どうもナチス=優生社会=巨悪という図式は1960年代末ごろ成立したものらしい。ベトナム反戦や大学紛争のさなか、アメリカ東部の若手研究者は「人民のための科学」というグループを結成し、批判の矛先を当時急速に発展しつつあったバイオテクノロジーにも向け始めた。おりしも1973年にカリフォルニア大学で第13回国際遺伝学会が開かれ、彼らはそこで遺伝学と社会の問題を扱うよう、働きかけたのである。こうして実現したのが、遺伝学者アレンによる異例の講演「遺伝学、優生学、階級闘争」であったつまりナチス優性政策は、この時期に『否定的に再発見された』と言ってよいのである。」「『朝日新聞』1997年10月7日「スウェーデン不妊法と優生政策」]

「ニュールンベルグ裁判」(‘Judgement at Nueremberg’ 1961年・米) 製作/監督/脚本:スタンリー・クレイマー、原作/脚本:アビー・マン、出演:スペンサー・トレシー、バート・ランカスター、リチャード・ウィドマーク、マレーネ・ディートリヒ、マクシミリアン・シェル、ジュディー・ガーランド、モンゴメリー・クリフト。第2次世界大戦後ドイツのニュールンベルグ(あるいはニュルンベルク)で行われた戦勝国によるナチス戦犯の戦争裁判の模様を描いた法廷ドラマ。かつてナチスの司法大臣を務め、第三帝国憲法起草にかかわったヤニングをはじめ、司法関係者を被告としたこの裁判劇によっ

て、ユダヤ人虐殺の元凶が誰にあったのかを、鋭く問いかけていく。

(B&W 179分)

もちろん、先述のアメリカの動きについては数年早く作られていた映画「ニュールンベルク裁判」が、かなり大きなインセンティブを形成していたであろうことは、想像に難くない。しかし、こと断種に関しては、ハリウッド映画の中で、繰り返しようってつけの悪玉役になることに大きな貢献をしてきたナチズムが、諸悪の根源として内包していた優生政策と同種の悪を、アメリカ自身が自ら抱え込んでいたことの矛盾はどのように説明するのか。きわめてあからさまなすり替えの論理がそこには透けて見え、その背後には自らの悪を、他者になすりつけることにより自らを正当化するという偽善の態度が誰の目にも明らかである。あるいは沖縄におけるアメリカ兵（個々の知的能力の程度は別としても）が我が物顔でのさばり、沖縄の女性を、その年齢も考慮せず繰り返し性暴力の対象としてきたことに、彼らの人種的優越性すなわち優生が根拠として与えられてはいないのか。ともあれ、ドイツは敗戦後あらゆる優生政策を中止した。ナチスの「優生学」の悪夢は終わったかと思われた。しかしながら、本人の同意のない強制的な不妊手術は、いくつかの国々で戦後も引き続き行われていた。日本では1950年代に優生保護法に基づく不妊手術がピークを迎え、高福祉国家スウェーデンの汚点が暴かれるのは1990年代に入ってからのことである。ドイツにおける、医療技術の進歩と過去の記憶とはどのような関連しているのか。少々長くなるが一つの新聞記事を一部要約して紹介することにする。【『朝日新聞』1998年8月16日「出生前診断ードイツ」】

「ドイツでの、出生前診断の普及という現実と、人間の尊厳という理念のギャップは、ナチス時代の記憶も絡んで激しい論議を呼んでいる。最高裁にあたる連邦憲法裁判所が1993年5月に下した違憲判決もその一例だ。「22週以内なら障害を理由にした中絶を認める」刑法が

障害者差別と批判され、「理由を問わず12週以内の中絶は合法」とする新刑法が作られたが、判決はこれを違憲とした。理由を問わぬ中絶は、「人間の尊厳は不可侵である」という基本法第一条の理念に反するとしたのだ。だが、95年8月に新たに制定された刑法では、「12週以内なら中絶の3日前までに相談機関にカウンセリングを受ければ」合法になり、「妊婦の心身の健康に対する甚大な侵害がある場合」も期限を問わず合法となった。この改正の中心的役割を担ったフライブルク大学のアルビン・エーザー教授は「この条文に、障害が理由の中絶を合法化させる要件を含ませたつもりだった」と話す。遺伝学的知識の普及による差別解消を望む声も強い。ミュンスター大学の調査では、「障害児の中絶は正当ではない」と考える割合は、一般の人が37%、遺伝学者は47%だった。遺伝の知識が深いほど差別意識が減り、障害児中絶に危機感を持つというわけだ。また、80年代に約3千件あった「胎児の障害を理由にした中絶」が、94年838件と減少しているのは、「遺伝カウンセリングが普及し、『誤った遺伝知識による障害への不安』だけで中絶する人が減ったからだ」とする論文も発表された。フランクフルト大学遺伝学研究所のウルリッヒ・ランゲ所長は「人類は誰でも何らかの確率で障害につながる遺伝子欠損を持っている。遺伝についてもっと知らせ、障害への差別をなくすことも、我々の仕事。国内に約200ある遺伝子相談所では、年間5万-10万人が相談しているはずだ」という。しかし、完璧な子を、という親たちの願望はドイツでも根強い。同所長は「ナチス時代は、上からの、今は下からの優生思想です。もし将来、我々遺伝学者に対し、上から何らかの圧力がかかるなら、私は遺伝学者を辞める」と厳しい表情をみせた。1995年に約150団体が集まって作った「出生前診断による淘汰に反対するネットワーク」のハイルバグ・ベージェナー代表も「今は、個々の女性の決断が、優生思想になってしまうという状況です」と悩む。ナチスの優生思想の犠牲者はユダヤ人だけではない。半世紀前、ドイツの

医師たちは多数の市民の殺害にも加担した。精神障害者、結核患者、知的障害者、非行少年、アルコール中毒者ら20万人以上が「生きるに値しない」と判断され『処分』された。その施設の一つ、北部のハダマーという小さな町の精神病院の地下には、シャワー室に似せたガス室が保存されている。ここで殺された患者たちの死体は隣にある手術室で研究用に脳を切り取られ、奥の火葬場で焼かれた。計1万人以上と記録されている。そんな履歴を持つ優性思想が、「下からの」「個人の選択」に変わったとしても、その時代の限られた知識や価値観で「生きるに値しない命」を選ぶことは許されるのだろうか。ベーゲナー代表らの憂慮は、そこにかかる。現在の技術で分かる障害は人類のだれにでも起こりうる多様な障害のごく一部だ。だが、現状では漠然とした不安が診断可能な障害にだけ向けられ、遺伝カウンセリングも「軽い障害なら受け入れ、重い障害なら中絶する」ための免罪符にすぎない。「人間の尊厳」や障害児を社会で支え合う必要性は、診断の技術論と切り離されたままだ。ハダマーの記念碑にはこう刻まれている。人間よ、人間に敬意を！」



かつてナチスは、生きるに値しない人間かどうかの判断を国家権力すなわち合法的に行った。科学技術が進歩することにより「優生学」の中身も変容していくであろう。少なくともナチスの時代には、「羊水検査」や「血液検査」などの胎児診断技術はなかった。それが臨床応用されるのは、1960年代以降のことである。日本各地で胎児診断を積極的に推し進めようという動きが出てきた。たとえば、兵庫県衛生部では「不幸な子どもを産まない対策室」を設置した。当時の妊婦向けの「あなたのために」と題するパンフレットには、新しい技術の紹介とともに、妊婦に向けて「ダウン症」などの障害を持った子どもを産めば母親が不幸になるというキャンペーンが平然と行われた。これに対しては、障害児を持つ親たちの強い反対運動が起きて、対策室は

4年で廃止された。

「八日目」(‘Le huitième jour’ ベルギー＝フランス・1996年) 監督／脚本：ジャコ・ヴァン・ドルマル。出演：ダニエル・オートユイユ、パスカル・デュケンヌ。妻子に愛想をつかさされるほど仕事一筋の、資本主義社会ではどこにでもいるような中年男性アリーは、偶然ジョルジュというダウン症の青年を車で拾う。ジョルジュは母親と会うために障害者施設を脱け出してきたのだった。だがその母親はすでにこの世にいなかった。自己中心的ながらもそれでいて純粹無垢なジョルジュとともに時間を過ごすうちにアリーの心にも忘れかけていた人間性が蘇ってくる。現代人に求められている他者への共感と愛情をテーマとした作品。「トト・ザ・ヒーロー」のJ・V・ドルマル監督が旧約聖書の天地創造をもじったオープニングのファンタスティックな映像作りや叙情豊かな自然描写に手腕を発揮している。ジョルジュ役のP・デュケンヌは実際にダウン症にかかっているが、その感性豊かな演技はカンヌ映画祭でも絶賛された。最近よく言われている、人間の多様な生き方の共存という「ノーマライゼーション」の理念を、この映画は現実の社会に一步先んじて映像の中で実現して見せたという意味において大変ユニークな作品である。(118分)

現在の先端医療は、出生前診断の技術を飛躍的に進歩させた。もし、生まれてくる子供がダウン症になる確率がきわめて高い場合に、産むかそれとも産まないか。産まないと判断すれば、それはその子に生きるに値しないと宣告することになる。ただ一つ違っている点は、ファシズムにおいて生きるに値しないと判断したのは国家権力で、現在その判断は親に委ねられているということである。したがって、一つの社会の中で子どもを産むということの別の重みが、これからは加わっていくことになるということに深く思いをいたしたい。科学技術の進歩は、もちろん科学者の功績であるが、彼らが結果責任を負うということはこれまでは非常に稀であった。したがって、その結果責任は、

ますます重く我々普通の市民の肩に重くのしかかってくる時代になったという認識は持たねばならないだろう。そして、「優生思想」は「生命の選択的廃棄」であることを、我々はたえず認識しておかなければならない。

最近頻発する問題に「医療過誤」がある。さまざまな要因が複雑に絡んでいて、深刻な社会問題の一つとなっている。ただ、ここで指摘できることは、医療システムの権力性・権威性・閉鎖性といった側面ではなく、医者と患者の圧倒的な情報格差の問題である。これは問題が二つある。一つは、医療側の情報開示の立ち遅れ・情報の隠蔽という面と、我々患者予備軍の医療情報に対する無知である。権威を持った医療と患者のいわばタテの関係から、カルテの開示、インフォームドコンセントの普及がさらにすすめば、それらを解説するための最低限の知識を持つ努力をしなければならない。筆者が提唱する「メディカル・リテラシー」とはそういったものである。

その手がかりを再びここではいくつかの映像番組に求めてみることにしよう。紙数の都合で詳しい解説はしないが、概略は読み取れるはずである。ただ一つ指摘しておきたいことは、人間の「生老病死」は、地球環境や生態系、情報、メディア・リテラシーそして教育〔学校と家庭での〕、地域社会における生活といった問題は密接に関連し合っていて、これからの世界観のネットワークの一部を形成していくであろう。そして、それぞれの番組のタイトルや、個々の講義題目を見渡すだけで、なんらかの展望や学ぶべきことの全体のイメージが得られることであろう。

「生命科学と人間」〔1989年1月～3月、NHK 人間大学、講師：中村桂子 全1112回 各45分〕

講義内容：(1)生命科学とは、(2)人間の位置づけ①～DNA にみる生命の流れ～、(3)人間の位置づけ②～多細胞生物～、(4)人間の位置づけ③～地球で生きる～、(5)組み換え DNA 技術～新しい展開～、(6)人間

を考える①～グロビン遺伝子から～、(7)人間を考える②～免疫～、(8)人間を考える③～がんとウイルス、(9)健康・食物・環境～新しい農業～、(10)健康・食物・環境～これからの医療～、(11)新しい科学技術の展開。

「ヒトと技術の倫理」〔1993年1月～3月、NHK人間大学、講師：加藤尚武 全12回 各30分〕

講義内容：(1)鉄腕アトムの人間性、(2)印刷術と火薬と羅針盤、(3)進歩という観念の進歩、(4)ガリヴァーのタイム・トラベル、(5)『モダン・タイムス』は何を批判したか、(6)ハイデガーの技術論、(7)『苦海浄土』—人間性への問い—、(8)環境破壊への警告、(9)江戸時代の森林保護思想、(10)ターザンの倫理、(11)スモール・イズ・ビューティフル、(12)化学と倫理—鉄腕アトムとターザンの対話—

「免疫・『自己』と『非自己』の科学」〔1998年1～3月、講師：多田富雄 全12回 各30分〕

アレルギー、がん、エイズ、臓器移植。医学の諸問題に関わり、生命科学の中心として脚光を浴びる「免疫」。免疫学の最前線をわかりやすく紹介しながら、人間の生命について考える。

講義内容：(1)脳の「自己」と免疫の「自己」、(2)伝染病と人間、(3)免疫という劇場、(4)免疫の「知」、(5)私は誰？私のバーコード、(6)胸腺とT細胞、(7)多様性の起源、(8)自己の体制の成り立ち、(9)拒否の病理 アレルギー、(10)自己免疫の恐怖、(11)あいまいな自己～移植、がん、妊娠、消化器官、(12)免疫の広がり～超(スーパー)システム。

「21世紀の倫理を求めて」〔1993年1月～3月、NHK人間大学、講師：加藤尚武 全12回 各30分〕

生命と情報に関する技術の進歩。それは暮らしのなかに大いなる利便や可能性をもたらすと同時に、トラブルや困惑、犯罪に至るまで、さまざまな問題点を提示している。人間が作り上げた技術死に、人間はどう向き合えばいいのか。さらに、技術の影響力が地球の生態系の

バランスを崩しかねない中で、人々は何を考えるべきなのか。生命・情報・環境の倫理が、現在そして未来へのキーワードになる。

講義内容：(1)個人は医療に対するどんな権利があるか、(2)性転換手術の倫理問題、(3)細胞工学の安全性、(4)1000キロ離れた患者に手術～医療の情報化、(5)ネットワークとポルノグラフィー、(6)情報化で起きている犯罪、(7)印刷からコンピュータへ～教育の転換、(8)生物は特許の対象となるか、(9)母乳のダイオキシンを減らす、(10)チェルノブイリ事故はどうすれば防げたか、(11)食料難時代は到来するか、(12)21世紀のライフスタイル。

7 おわりに

最後に、深い感慨を呼んだ番組を一つ紹介して、考察を終えることにする。

「いのち再び～生命科学者・柳澤桂子」〔1999年11月5日・『ドキュメントにっぽん』NHK・45分〕61歳の柳澤桂子さんは、生き物の生と死をテーマに多くの科学エッセーを表してきた生命科学者である。遺伝や脳のメカニズム、生き物にとっての死の意味など。最新の科学的知識と、木の葉にも生命の息吹を感じるという詩人の感性がとけあった文章は、多くの読者を魅了している。しかし、そうした著作のすべては、実は重い病気と闘いながら書かれてきたものだ。柳澤さんは、最先端の研究者だった32歳のとき、原因不明の病に倒れ、研究を続けることを断念した。それから30年、ベッドの上で文章をつづることに生きがいを見いだすが、数年前からは、それすらもかなわないほど病状は悪化した。寝たきりになった昨年は、あまりの苦しさ自ら死を決意したという。自分で食べられなくなった生き物は死ぬのが自然の摂理だと考えたからであるという。ところが、本年になって柳澤さん

は劇的な回復を果たした。夫、嘉一郎さんをはじめ家族の励ましによって、生きる意思を取り戻したとき、最後の望みをかけて試した薬が効いたのである。番組では、病から奇跡の生還を遂げた柳澤さんの姿を通して、科学者が身をもって体験した「いのちの不思議」を落ちついた筆致で描く。

生命とはじつに不思議である。そして誰にでも、生物的な死は訪れる。人間の生への執着は強いし、筆者もそれを否定はしないが、果して死んだらおしまいよ、生きているうちが花なのよ、で世界観は完結していいものだろうか。生と死を単純な二項対立でとらえれば、その論理は成り立つ。だが仮に、死を一種の休息とたとえ、新たな生への充電期間と考えれば、生と死は無限の連鎖となる。ちょうど生と死を、プラス軸とマイナス軸を大きくうねり続ける波の連鎖のようにイメージしてみるとよい。生の中の毎日が、睡眠と起床の繰り返しである同様に、筆者は生と死をできればそのようにイメージしてみたい。たとえば、それが現在を生きるための作業仮説であるにしても、そこから生まれるエネルギーが前向きベクトルとなることは、経験的に確かなことであるのだから。

引用および参考文献

- 「精神医学とナチズム」小俣和一郎著 講談社現代新書 1997年。
「ミドリ十字と731部隊～薬害エイズはなぜ起きたのか」松下一成 三一書房 1996年。
「ナチスドイツ支配民族創出計画」キャトリーン・クレイ／マイケル・リーマン著 柴崎昭則訳 現代書館 1997年。
「普通の人々」クリストファー・ブラウニング著 谷喬夫訳 筑摩書房 1998年。
「優生学と人口政策－ヴァイマル・ドイツからナチス・ドイツへ－」『思想』2001年1月号 No.920 p.99-118. 2001年

「スウェーデン断種法とナチス神話の成立」米本昌平『中央公論』1997年12月号.

「スウェーデン不妊法と優生政策～戦後各国の実態検証を」米本昌平『朝日新聞』1997年10月7日.

「福祉国家スウェーデン、不妊法の過去」『朝日新聞』1997年8月31日.

「優生学と人間社会」米本昌平 他共著、講談社現代新書 2000年.

「操られる死」ハーバート・ヘンティン著 大沼安史他共訳 時事通信社 2000年.

「医師はなぜ安楽死に手を貸すのか」チャールズ・F・マッカーン著 杉谷浩子訳 中央書院 2000年.

「細菌戦争の世紀」トム・マンガールド/ジェフ・ゴールドバーグ著 上野元美訳 原書房 2000年.

「脳死移植報道の迷走」浅野健一著 創出版 2000年.

「脳死の人」(増補決定版)森岡正博 法蔵館 2000年.

「メディアと情報は誰のものか」渡辺武達 潮出版社 2000年.

「裁判に花を」島比呂志 八十路書房 1999年.

「メディア、あるいはファシズム (1)レニ・リーフェンシュタール論」吉田和比古『法政理論』新潟大学法学会 第30巻第2号 p. 1-29. 1997年.

「メディア、あるいはファシズム (2)ドキュメンタリー〔記録〕とドラマ〔物語〕の境界」吉田和比古『法政理論』新潟大学法学会 第32巻第1号 p. 37-74. 1999年.

「メディア、あるいはファシズム (3)ドキュメンタリスト・亀井文夫と戦意高揚映画」吉田和比古『法政理論』新潟大学法学会 第33巻第1号 p. 1-33. 2000年.

「物語の構造(3)～映像言語教育としての『メディア・リテラシー』～」『新潟大学言語文化研究』新潟大学教育開発研究センター 第6号 p. 85-100. 2000年.

(補足) 元ハンセン病作家・島比呂志氏の関連図書や関連テレビ番組の収集にあたっては、長岡高専非常勤講師・山下多恵子氏のご協力をいただいた。

また筆者は、本稿校正中に一人のアメリカの映画監督の訃報に接した。スタンリー・クレマー氏、享年87歳であった(2001年2月19日ロサンゼルスで死去)。「真昼の決闘」(1952年)では生命を賭けて悪に挑む正義の保安官を描き、「手錠のままの脱獄」(1958年)「招かざる客」(1967年)では、アメリカ社会に根強く残る黒人差別問題を、「渚にて」(1959年)では冷戦下の核による人類絶滅の恐怖、そして「ニュールンベルグ裁判」では、司法制度そのものの欺瞞性に鋭い疑問を投げかけた。ハリウッド映画の枠組みの中で社会的メッセージ性の強い作品を作り続けた映画作家の一人として、クレマー氏は、20世紀の映画史の中で永遠に記憶されることだろう。